
南桜高校野球部

屋下雨宿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

南桜高校野球部

【Nコード】

N6148Y

【作者名】

屋下雨宿

【あらすじ】

野球部モノのようなそうでないのような。

序、覚めない夢と情性の続き

俺には幼馴染がいた。隣の家に住むお幼馴染。母親同士が同級生で仲が良かったこともあり、幼い頃からよく一緒に遊んでいた。遊んでいたというか、なんというか。いつも手を引かれているのは俺の方で、毎度毎度、無理やり連れて行かれるような感じだった。二人で探検に出て迷子になって、散々怒られた事もあった。つまらない悪戯で家の母を驚かせて骨折させた事もある。ちよつと行き過ぎた感じの子だった。

でも、嫌ではなかったし相手の事も嫌いではなかった。

しかし、そんな時間も長くは続かない。

別に不慮の事故があったとか、突然の引っ越しとか、そんな悲劇めいたものがあつた訳ではない。

年齢は向こうが一つ上で、性別も違つたから。それだけの事で、それが全てだった。

歳を重ねるにつれて、お互い同年同性の友達と遊ぶようになると、一緒にいる時間は減っていく。当然、俺達の距離も開いていった。ごく自然で当たり前の事だつたと思う。

それでも、小学生の内は通学団が一緒だったので接点はあつた。毎朝あいさつする程度の関係だがまだ繋がりは残っていた。しかし、中学生になるとそれすらなくなってしまう。ただ隣に住んでいるだけ。全く会話もない他人と言つても差し支えないような状態になつ

ていたのだった。

*

四月のはじめ。今日は入学式。俺も気が付けば高校生になる。

「身長も顔つきも子どもの頃とは全然違う」

カメラで写真を取りながら、アルバムを見るという器用なスキルを駆使する母親が呟いてた。しかし、そんなこと言われても本人にはピンとこないものである。

時間の流れとは確実に残酷なものだ。人間の主観や客観でそれを正確にとらえる事は難しいと思う。

「凄く立派になった！よし、行つてこい！」

母親がバンバンと俺の背中を叩く。そうは言っても、俺が入った高校は地元の三流高校。凄くもなんともない高校。何もなかった結果、なった高校生だ。全く立派だとは思っていない。

ようやく母親に解放された俺は、肩苦しそうにネクタイを直した。制服は中学で着慣れた学ランではなく灰色っぽいブレザー。その胸ポケット辺りに、鳥が羽を広げているような校章が縫いつけられている。

私立西桜高等学校。

俺が入学する高校の名だ。

その立地は最悪で、畑の真ん中にポツリと立てられている田舎臭い高校だ。周囲には、本当に何の建物もないので、すぐく目立つがそれ以上に物足りない。

まあ、その分だけグラウンドは広い。それでも、運動部が強いような話は聞いたことはないのだが。

入学式ということもあつてか、正門では上級生や先生が新入生を迎え入れている姿が見える。その門の前では、パンプレートを配る業者のお姉さんがいた。これも何処にでもある光景だろう。

しかし、何かが足りない気がする。

俺は校内の駐輪場に自転車を止めて考え込んでいた。

ああ、そうだ。あの木が足りない。校内にも周辺にも桜の木が見当たらないのだ。学校名に『桜』なんて付いている訳だし、一本もないという事はないだろう。時計を見る。まだ時間もあるので探しに戻ってみようか。僕はUターンをしてきた道に戻る。

あつた。

それは案外あっさり見つかった。正門を超えてすぐの左側。校舎側と言った方がいいのだろうか？芝を敷きつめ中庭のようになった場所のとなりにポツリと植樹されている。それも、たった一本だけ。俺と同じ今年の入学生だろう。桜の下にたむろして、写真を取り会っている学生の姿は少なくはない。しかし、一本の木に群がる新入生というのも惨めなものだ。

暇をつぶした結果、余計に虚しくなつたし、この学校にもちよつとだけ失望した。

代わる代わる桜の下に滑り込む学生達を横目で見ながら、校舎へ向かう。その入り口、昇降口には「クラス編成」と大きく書かれた紙が張り出されている。これを確認してから中に入る訳だが、やはりここにも学生の群れ。その量は尋常ではなく、その集団の最後尾からでは自分の名前を探すのは困難だ。つまりこの中に割って入っていかなければならない訳だが、この人混みにもみくちゃにされる可能性を考えると気が滅入る。

仕方ないので、しばらく後ろで待つことにした。そこら辺にいる人の顔を遠巻きに覗いてみるが、知っている奴はいない。当然と言えば当然か。中学校の校区から南桜高校までは自転車で五十分ぐらいの距離があり、もっと近くていい高校はいくらでもある。俺みために成績が悪くない限り、そちらを選ぶのが普通だろう。

それでも、見知った顔は全くない訳ではない。俺みたいな成績の悪い奴がいた筈だが、今のところは一人も見えていない。とりあえず、話し掛けてくるような仲のいい奴がいないので、こちらから探す気もないし、どうでもいい事なのだが。

人が減ってきたところに割り込んでいきクラスを確認。そしたら、さっさと中に入る。

ようやく校舎に入る事が出来た。人混みを抜けて一息つく。下駄箱は木製で所々欠けていたり、角がすり減って丸くなったり。どうやらかなりの年季物のようだった。そこで学校指定のスリッパに履き替える。

廊下の床一面ワックス掛けでもしたのだろう、古く臭い校舎の中で廊下だけが無駄に輝いていた。そして教室へ。もう大半の生徒が席についていたので、俺も自分の席を探してさっさと座ることにした。

間もなくチャームが鳴ると、担任が教室に入って来る。

今のところ面白い事は何もない。今日一日はこんな感じだろう。いや、明日も明後日もそうかもしれない。大体、ここは何の目的もない中学の延長だ。名前が高校に変わっただけで情けない事に変わらない。

今はまだ、そう思いながら肘を付いているだけだった。

2、隣人との強制的な再会方法

桜の季節も過ぎ去り、新しい学校、新しいクラス、それにもようやく馴染んできたと感じる四月の終わり頃。

それは突然訪れた。

基本的に何事にもやる気を出さないでいた俺は、当然ながら部活はせずに帰宅部を選択している。その日の終礼が終わると真っ先にクラスを出てとっとと帰る。これが日常だ。

自転車に跨り風の強い畑道を抜けると、やや新しめの一軒家が立ち並ぶ住宅地へ。その中央付近に埋もれている自宅へと真っ直ぐに向かって行く。分離帯や信号のある通りの道を離れ、自動車一台がやっと通れるぐらい細い道。その突き当りの丁字路。ここを右に曲がれば家が見えてくるだろう。その角を曲がったところで、俺はある事に気付き自転車を止めて足を付いた。

誰かいる？

そう、自宅の前に誰かが立っていたのだ。

よく目を凝らしてみる。そこには、南桜の制服を着た見覚えのない女子の生徒が立っていた。何故か腕を組み仁王立ちをしている。何故、堂々と人の家の前に立っているのだろうか。同じ高校生という事で知り合いの可能性を考えてみるが思い当たる節はない。うーむ、不審だ。

どちら様でしょうか？などと声を掛けてみようかと考えたりもし

たが、やっぱり思い止まる。

それは制服のリボンの色に気付いたからだ。南桜高校では、学年によってリボンの色が変わる。男子だとネクタイの色だ。一年が赤系、二年が黄色系、三年がオレンジ系の色である。自宅の前に立っている不審者のリボンは黄色。よって二年生だ。上級生ともなると益々接点はなくなる訳でして。

しかし、このまま通り過ぎる訳にもいかない。それでは、一生家に帰れなくなってしまう。その場で自転車に跨ったまま考え込んでいると、向こうがこちらに気付いて歩いてきた。その距離約五十センチ。手を真っ直ぐ前に伸ばしてもギリギリとどかないぐらいだろうか？そこからジロジロと見上げるように俺の顔を覗きこんでから一言。

「かはら ゆきとも葛原 幸基？」

ああ。そうだ。それは間違いなく俺の名前だ。

俺は少女の問いに答える前に、目の前の少女をよく観察する。身長は俺より頭一個分低いぐらい、多分百六十センチ前後だろう。活発そうな真つ黒の黒髪ショートで、自信がありそうなやや釣りあがった目。体育系だろう足が長くスカートからのぞく太もももなかなか立派である。多分、校内でも魅力的で高レベルな部類だろう。だけど、この少女に見覚えはなかった。

「そうだけど。アンタは？」

特に言葉を選びもせず聞き返すと、何故かムスツとした表情をして更に詰め寄って来る。

「^{みしま}蓑島 有紀よ」

少女が発した名前。それは隣の家に住んでいる俺の幼馴染の名前だった。

言われてみればこんな感じだった気もする。口煩くて、キツイイメージ。小学校の時のイメージだが、今でもしっくりくる感じた。改めて見返すと、素直にあまり変わってないなとも思えてくる。どうして、気付かなかったのだろうか？

「知らないと言わせないからねっ！」

「思い出した。思い出したから」

俺が何も返さずに考え込んでいると、有紀の方からすごい剣幕で顔を突き出してきた。思わず両手を前に突き出して数歩分の距離を保ち自衛する。

「思い出した？つまり、忘れてた？言われるまで気付かなかったと？」

俺の一言で更に機嫌を損ねてしまったようである。一步、二歩とどつしりとした足取りで更に歩み寄って来る。自転車に跨ったままの俺には逃げる手段はない。こういうときは早めに話題をすり替えるに限る。

「そ、それよりどうしたんだよ、こんなところに立って。何か用でもあるんじゃないのか？」

「そうだったわ。幸基に用があったの」

「へ、へえ……どんな用事だ？」

「勝負しなさい！今すぐ私と勝負しなさい！」

俺を指差しながらいきなり訳の分からない事を言い出した。当然、俺は眉をひそめて口元を歪め、今の気持ちを率直に表現していたが、その抗議が受け入れられる事はなかった。

*

大きめのこたつ机を中央に置き、北西にソファを『く』の字に配置し、TVを南東に据えた洋室の居間。俺達、俺と有紀はそこでテレビを見ていた。

有紀が俺の家に来るのは何年振りだろうか？小学校の頃は結構頻繁だった気がするが、いつが最後だったのかはハッキリと憶えていないし、思い出せない。特別仲が良かった訳でもないし、覚えていないのが普通だろうか。

「あらあら、久しぶりねー。元気にしてた？有紀ちゃん」

「冬子さん、お邪魔してます」

冬子とは俺の母親の名前だ。

母が挨拶しながらお茶を出す。それに合わせて有紀は頭を下げた。母は今もよく有紀の家、蓑島家でだべっていることが多いので、有紀とも頻繁に会っているらしい。

有紀が家に来る事も実は珍しくなかったりするのだろうか？

「まだ、家のユキと遊んでくれてるなんて知らなかったわ。こいつは何も教えてくれないし」

「今日はたまたまです」

たまたま？人の首根っこを捕まえて無理やり入って来た人間の言う台詞とは思えない。

『激熱奮迅！ベースボールナイター！』

TVから掛け声とともに一際大きな音楽が流れ始める。CMが終わり始まった番組は野球中継だった。

「きたきたあああああつ！さーて、始めるわよ！」

アナウンサーの熱い実況など余裕でかき消す有紀の音量。突然、耳元で声を上げられると頭痛がするような感じがして、俺は上半身だけ大げさに逃がした。もう一つ言いたいが、番組が始まったぐらいで盛大にガッツポーズするのはやめてほしい。

「始めるつて、何を？」

「勝負よ！」

「だから何のさ？」

「何対何でどっちが勝つか賭けるの。それで近かった方が勝ち。点数よりも勝敗優先ね」

「わかったよ」

早口で一回言われたただだったが、何をするのか？そのルールは何なのか？案外、スルっと飲みこむ事が出来た。

「懐かしいわねえ。私も参加しようかしら」

母もそれに割り込んでくる。色々あったが、母は有紀の事が大好

きだ。事ある毎に「うちの子にしたわあ」などと言っている。

「いいですよ」

「懐かしいって？」

「あら、忘れたの？昔はお父さんとユキと有紀ちゃんをよくやってたじゃない」

「ふーん」

そんなことを言われても全く思い出せなかったが、とりあえず相槌だけ入れておく。

試合は地元のア球団と関西のB球団の試合。野球のルールぐらいは知っているが、野球中継なんてロクに見ていないのでどちらが強いのか皆目見当もつかなかった。

思い付きの適当で数字を紙に書く。紙に書く理由は、後でいい分を変えない為の証拠としてだ。

「決めた？」

「うん」

「私も決めたわ」

準備が出来たところで、掛け声に合わせて一斉に公開。

幸基	3	-	1
有紀	0	-	7
母	1	-	0

ちなみに、左側が地元A球団である。

有紀は内容を確認しながら自信あり気な笑みを浮かべて紙を回収

していった。

*

「まだゼロゼロか」

ソファーに寝転がってマンガ雑誌のページを捲っていた俺は、雑誌の脇からTVを見てつぶやいた。TVのボリュウムを俺が下げたしまった為に、すっかり意識しないと部屋の隅、俺のいるソファーまで聞こえてこない。

有紀と母はTVの前に座ってTVを見ながら何を話している。どうやら、俺の存在など完全に忘れているようだ。

「エース対決だし仕方ないね」

こっちを向いて母が答える。一応、聞こえていたらしい。

「ふーん、俺でもこれよりマシ思っけどな」

画面の向こうで、タイミングを完全に外されたスイングで無様な三振をする打者を見てからつぶやいた。そんな俺の親父臭いトークに有紀も加わってくる。

「幸基はまだ野球やってるの？」

「小学生までだけど」

「それじゃ無理ね」

「やってた！そういえば、やってわね！」

子どもの昔話には異様な喰いつきを見せるの母親の性だろうか？
俺からしてみれば嫌な予感しかないし、出来ればそこは軽くと流
しいてほしいものなのだが。

「確かこのアルバムにたくさん……」

いつ、どこから取り出したのか？カーペットの下にでも隠してあ
ったのか？気が付きた時には、母の右手にアルバムが握られていた。
誰が見ても新手的マジックだと、驚きの声を上げるだろう。

「そんなもの持ってくるな！」

慌ててソファーから飛び出して、アルバムを開く前にそれを取り
上げる。

「え〜」

母よ。四十超えた女が口を尖らせも、誰も可愛いとか言わないと
思っぞ。

「片付けてくるからな！」

「有紀ちゃんも見たいって言ってるし、一緒に見ようよー」

「え？私はどつちでも……」

などという会話には聞く耳を持たずに、アルバムを持って書斎へ
向かう。

書斎の扉を開けたらアルバムのネームテープを確認。『幸基八巻』
と書かれている。アルバムを順番になるように戻すと、並べられた
アルバムを前に溜め息を付いた。

俺のアルバムは現在全部で十二巻。集めれば円卓でも囲えてしまう数字になっていた。更に、家は3人兄弟で合計すると三十冊ものアルバムが並べられている。本棚二列分を占拠しているのだ。母の写真好きには困ったものである。

しかしこれだけあると、家族兄弟の写真だけでなく、友達と写っている写真も多い。枚数を数えた事はないが、有紀の写真もたくさんあったはずだ。

「馬鹿馬鹿しい」

仕舞ったばかりアルバムをもう一度取り出そうとしたが、頭を振った後にその手を止めて逃げるように部屋を出た。

「で、母さん。今日の飯は？」

「えーとねえ。冷蔵庫にハンバーグがあるから、焼いて食べてもいいよ」

「うーい」

俺は居間に戻って来てもソファーに居着かず、またすぐに部屋を出る。

別に腹が減っていたとか、ご飯が食べたかった訳ではない。有紀がいるからだろうか？居間にいると何だか落ち着かなかったのだ。だから、離れて漫画を読んでいたりもしたし、今も逃げ出すように部屋を出て行く。

それで、俺は何をやっているのだろうか？

そんなものは見ての通りである。俺はキッチンでキャベツ、人参、ピーマン、ウインナーなどをフライパンで炒めていた。所謂、夕食

の準備と言っ奴だ。母親にやれと言われた訳でもないし、普段からやっている訳でもない。

塩コシヨウと醤油、それにオイスターソースを少しだけ。シンプルな味付けである。

もういいかと思いい火を止める。それを一先ず大皿へ移すと、冷蔵庫からハンバーグを取り出して焼く。白飯の準備は母が済ませていたみたいなので、これで完成でいいだろう。

水切り付きの食器用プラケースを持って居間へ戻る。それから、料理や炊飯器を運んだ。

「ご飯出来たよー！」

母親が叫ぶと間もなく弟と妹が居間に駆け込んでくる。「お、ハンバーグじゃん。母さん分かってるねえ」「私、魚が食べたいって言ったんだけど」などなど晩飯の内容に感想を述べながら席に着く。母はそれを軽く受け流しながら、皿に取り分けていく。

てか、誰も有紀には突っ込まないんだな。ちゃっかり、茶碗まで受け取ってるし。しかもそれ俺の茶碗なんですけど。

手際良く準備を済ませて、こたつ机の一人ずつ座る。机は正方形で角は4つ。ここにいるのは、俺、有紀、母、弟、妹の五人。一人座れない訳で、俺がソファアの上に溢れていた。いや、まずはそれよりも……

「なあ、俺の食器がないんだけど」

「棚にお父さんのがあるから持って来なさい」

「はいはい」

「ちょ、ちょっと待って！これが、もしかしてこの茶碗……」

立ち上がる俺を有紀が引つ張った。もう片方の手に握られているのは、先程も言ったように俺の茶碗だ。

「俺のだけど」

「か、返すわ！って言うか、私、家でご飯食べないといけないし！そろそろ帰らないと怒られるし！」

有紀は何を思ったのか顔を伏せて茶碗をぐいぐいと押しつけてくる。中身が入ってるんだから、そんなことしたら危ないだろうに。

「じゃあね！」

俺が茶碗を受け取ると、有紀は一目散に部屋から出て行ってしまふのだった。

母はニヤニヤとした表情で何故か無駄に幸せそうだった。妹は「バイバイ」と手を振っていた。弟は我関せずと言った感じでご飯を食べ始めていた。

*

翌日。学校が終わり家に帰ると、何故かそこにいた。

何がかつて？そんな事は言わなくてもわかるだろう。有紀である。

「おかえり」

「……ただいま」

「何よ？今の間は。私が居たらいけないって言うの？」

「別にそう言う訳じゃないけど」

居間のソファアのどつかりと座りこんでいる有紀に対して、全く文句がない訳じゃないが、言っても面倒な事になるだけな気がする。なのでここは黙っておく。

「昨日賭けの事では話があるんだって」

奥からお菓子の袋を抱えて母が出てきた。それを机に広げると「どれがいい？」などという感じで有紀に選ぶに促していた。それに応えるように有紀は四袋ぐらい摘まみ取る。

おいおい。自分で言うのも何だが、人様の家だぞ？一袋にしとけよ。つーかそれ、俺の買ってきた奴なんですけど。

「あ？ユキも食べる？」

「いらね。それより話って何だよ？」

「そうそう、昨日の賭け私が勝ったでしょ？だから私の言う事一つ聞いてもらっからね」

「は？」

そう言えば、野球ってどうなったんだっけ？最後まで見てないというか中継が終わったので……。いや、それよりも「言う事を聞く」とか小学生の約束かよと言いつてやりたいのだが。

「は？じゃないわよ。昔からそうだったでしょ？」

「文句なんか言わずに、女の子のお願いの一つくらい聞いてあげなさいよ。そんなことだからいつまで経っても彼女が出来ないのよ」

母も打ち合わせでもしてあったかのように有紀の味方をする。

「分かったから、言ってみろよ」

ここで文句を言っても形成が悪くなるだけである事を理解し、半場諦めた様に言い放つ。

それ聞いた有紀は満足気にソファから立ち上がると俺の前に立つ、そして蛍光灯目掛けて指を一本付き立てた。

「甲子園目指すわよ！」

甲子園？昨日までの展開から察するに野球の事だろうか。顔をしかめる俺の隣で「あらいいわね」となど言いながら手を叩く母親の姿はわざとらしい。

「まあ、いいけどさ。野球部ぐらい……」

「え？」

目を丸くして、鳩が豆鉄砲を喰らったかのように目を丸くして驚いた顔をしている。それでも、微かに売るんだその瞳は真っ直ぐに俺の方を見つめていた。

何でそんなに驚くんだよ？　と思っていたら母まで同じような顔をしていた。お前らは俺がどんな反応すると思っていたんだよ？

俺はまだその意味を知らなかった。いや――

3、 野球部なんて、なかった

放課後。

校舎を出るためには必ず通過しなければならない下駄箱。俺はそこで有紀に捕まった。クラスの中では一番に出てきたはずだし、まだ一日の終わりと告げるチャイムもなっていない。どうして待ち伏せなどできるのだろうか？……まあ、それだけゆるい高校だと言うことだろう。

「逃げる気だったでしょ？」

お見通しだと言わんばかりに鼻を鳴らす。

しかし逃げるも何もないだろう？野球部云々の約束はしたけど、今日会う約束何てしてないのだから。

「それじゃあ、行くわよ」

なんて考えはしたものの特に反論する事もないまま、有紀に引き摺られるように部活棟へ向かうことになった。

校舎を出たら正門とは逆の方向へ。校内の一番奥にあるプレハブの二階建て。そこが部活棟だ。先を歩く有紀は一階一番奥の扉まで行くとその扉に鍵を挿す。しかし、その扉には部活名の書かれた看板が掛けられていなかった。隣は『陸上部』。その向こうは『テニス部』と言った感じの一目でわかる看板が扉に取り付けられていたが、ここにはそれがなかったのだ。

これは、どうということだろうか？

何か怪しい感じがするなあ……なんて思考を巡らせていると、俺は決定的な事実を思い出してしまう。

そう。あれは、新入生歓迎会の話だ――

体育館に集まり舞台の上上がった先輩達の興味のない話を聞かされた後の事。続けて部活動の紹介・勧誘が行われた時だった。同じように舞台の上に各部活の代表が二、三人ずつ出てきて、活動内容とかどんな人に来てほしいとかそんな感じの有触れた勧誘活動をこなしていく。俺はあまり聞いていなかったが、それが終わった後に隣の奴が「野球部ないんだな」なんて話し掛けてきた事があったのだ。その後、配られた部活一覧のパンフレットにも、野球部はなかった。それについても一言二言話をしたはずなので間違いはないだろう。

結局、俺の辿り着いた結論はこれだった。

この高校に野球部なんてないんじゃないのか？

鍵を開けて中に入って行こうとする有紀に、少し遠回しに疑問を投げ掛けてみる事にする。

「部員いるの？この部活」

「いるじゃない。ここに」

つまり、私がそうです。と言いたいのだろう。これでは何もわからない。ちよつと遠回しが過ぎたか？仕方ないので続けて別の質問をする。

「ピッチャーってどんな奴なの？」

「あー。その内来るでしょ」

やはりハッキリとした応えはかえってこない。更に続けて部員の人数を聞いたが、それまでばやかされてしまった。そうこうしている間に、俺の思考は段々おかしいな方向へ暴走をはじめていた。

（おいおい。これはもしかして、有紀一人だけの怪しいサークルとか言うんじゃないだろうな？宗教とか占いとかUFOとかそんなものは勘弁だぞ？いや待てよ。母もグルだったよな？これは旅行部とか言い出しかねない。これはありえる。しかし、そうなったら約束が違うじゃねえか。ここはビシツといってやるべきだろう。うん。俺は悪くない。悪いのはお前らだ）

そんな思考の果てに俺は覚悟を決めて口を開いた。

「もしかして、もしかしてだな……」

「うん？」

「野球部なんてないんじゃないのか？」

「だからあるって」

「しかも、お前以外に部員いないんだろ！？」

「ん？」

「いないんだろ！やっぱおかしいと思ってたんだ！新生歓迎会の時も、部活棟のネームプレート見ても、野球部なんて名前はなかったじゃないか！？」

「あー、それはだね……」

有紀はトーンを下げて片手を上げて小さく手を振っていた。俺に落ち付けとでも言いたいのだろうか？だが、ここで引く訳にはいか

ない。

「俺は昨日から気付いていたぞ！野球部がない事を知っていてこの話を承諾したんだからな！本当の目的は何だ？やはり母もグルだったのか？はやく言え！さもなくば……ぶへっ！」

渾身の左ストレートが顔面に直撃する。説明しよう。有紀は左利きだ。右にしろ、左にしろ居たい事に変わりはないのだが。わりと本気で殴られたみたいで、鼻血でも出そうな位に痛い。しかも、話の途中だったから舌も噛んだし余計に痛い。

「落ち着いて、後ろを向け！」

有紀の指の動きにつられて口元を押さえながら振り返る。そこには、眼鏡を掛けた男子学生の顔が目の前にあった。

「うわっ！」

その学生はぴったりくっつくぐらいの真後ろにいたので、俺は驚いて飛び跳ねるように離れる。自分でも何で気付かなかったんだろうかと言いたくなるぐらいだ。それだけ、自分の思考に没頭していたのだろうか？そうは思いたくないが……。

改めてその学生を見る。ブレザーの上からでも分かるぐらい体格の良くない感じ。それに、黄色のネクタイは二年の証。有紀の同級生だろう。

「こんにちは。今日は早いね」

「部長もはやいですね。この馬鹿がうるさくてごめんなさい。これでも一応。新入部員なんですけど……ほら」

有紀に押し出されるような形になり、軽く会釈を交えながら俺も挨拶をする。

「こんにちは」

部長と言うからは野球部の部長なのだろうか？どうやら、これは部員も部活も存在していたということだろうか？

「よろしく。新入部員くん」

笑顔で握手を要求されたのでそれに応じる。悪い人ではなさそうだけど、野球部と言う感じの手ではなかったし、運動部と言う感じの体格にも見えなかったのがちょっとだけ不安だった。

*

明かりもつけていない薄暗い部室。窓は小さく射し込む明かりは限られている。広さは二十畳以上あるのだろうか？意外と広いその部屋はまだ何も飾られていない真っ白な姿をさらしていた。

つまり、机や椅子、ロッカーなど部室にありそうな用具もここには存在しない。

唯一置かれている物と言えば、片隅に纏められた野球の道具だけ。こちらは、ボールからキャッチャーのプロテクターまで一通り揃っていた。

この一式を見て俺はようやくここが野球部だと認めた。慣れない問い掛けから答えを引っ張り出すより、こうやって中を確認した方

がはやかったのかもちょっとだけ後悔もする。

それから、ボールを手の中で転がしたり雑談をしたりしながら待つ事二十分。ようやく部員が集まったようで、部長が号令を掛ける。その後すぐに自己紹介が始まった。

もう一度、部室を見渡す。部室にいるメンバーは五人。

まずは部長の掛け谷 充。二年。眼鏡を掛けないと何も見えないほど目が悪いらしいが、普段はあまり眼鏡を掛けていないという変わり物。インドア系で読書が趣味らしい。野球経験はほとんどなく運動神経もあまりよくないらしい。

青山 小助。二年。何と言うか顔にもルックスにも特徴がない。いや、この際は目立った欠点がないというべきか？部長と違い、中学まで野球をやっていたのでそれなりの経験者だという事だ。

石江 七種。ななくさ一年。昨日入部届けを出して、実質今日からの参加らしい。何と言ったらいいいのか、鼻が凄い。とにかく凄い。頂点から平らに潰された鼻だが、何故か鼻の穴が捲れ上がっていて、鼻の穴が丸見えになり豚の鼻のようになっている。初見は思わず吹き出してしまった。

悪い事をしたとは思っている。許してくれ。

彼は中学時代も野球部で、地元ではそこそこの名知れた選手だったらしい。それが何故、こんな高校に入ってきたのかは疑問であるが。あまり深く考えても仕方ないだろう。

それに、俺と有紀を含めた計五人だ。

他にも部員が三人いるらしいが、今日は来ていないという事だ。半分幽霊のようなものらしく、ほとんど姿を見せないという話だ。

った。

「ちょっと待てよ」

「何か質問でもあるのかい？何でも聞いてくれよ」

「五人でどうやって野球をするんだ？幽霊含めても八人しかいないじゃないか」

「甘いわね。私はマネージャーで参加できないから実質7人よ」

有紀が得意気に訂正を入れるが、全然威張れた事ではない。むしろ、非常に忌々しき事態だろうに。

「蓑島は『部活部活』って言ったかもしれないけど、実はまだ同好会なんだよ。野球同好会」

「はあ」

それから、先輩達から野球部の現状について説明をもらった。

先輩の話をまとめると、部活として承認してもらうためには最低十人の部員と顧問の先生が必要だという事。去年から幽霊含めたメンバーで同好会として、活動しているという事。それまでは他の部活より圧倒的に優先順位が低い為、絶対にグラウンドでの練習は出来ないという事。だから、現在は部員集めを積極的に行っているという事。一応部員の目途は立っているらしいという事。最後に部長は掛け谷先輩がやっているが、実質的には有紀が一番の権力者だという事。本人は否定していたが、有紀の性格を考えるとまず間違いはないだろう。

これぐらいだろうか……？

そうそう。ついでに言っておくと、元が女子校なのでこれまで野

球部があつたような歴史はないらしい。とは言つても、共学になつてもうすぐ二十年。男女比も校舎内にもそれらしい名残りは残っていないのだが。

「まだ四月だし今はうまくいなくても、これから新入生も増えると思うよ。きつとね」

という部長の言葉は曖昧な憶測を重ねており、如何にも自信がない姿が窺える。

「折角二人も入部してくれた事だし、たまには練習しようか？」

たまには？そんな言葉を聞くとほとんど練習していないのか？と尋ねたくなるが、これ以上野暮ったい事は気にしないことにした。

とりあえず、「甲子園目指すわよ！」なんて冗談でしか言えない状態である事は理解できたので良しとしようか。

4、 気に入らないのは

練習をするという事で、俺達はジャージに着替えて部活棟を出た。

一目見ればわかるが、グラウンドは満員御礼だ。中央を使っているのはサッカー部。その奥に女子のハンドボール部の姿が見えて、更に奥の専用コートにテニス部がいる。そして、脇の方のスペースには陸上部が陣取っていた。とても俺達が使えそうなスペースがあるようには見えない。

しかし、先輩達はそんな運動場の光景には目もくれなかった。行く場所は決まっているらしいので、俺達一年はただ黙って付いて行く。グラウンドとは全く違う方向へ向かうかと思えば、校門を出て

……

「え？ちよつと！何処行くんスか？」

石江が動揺して声を上げた。こいつが言わなかったら俺が同じ反応をしただろう。それもそのはず、二年生達は学校を出て道路を跨ぐとすぐその畑に入って行ったのだ。誰ん家かも分らない畑に入ってはいけない事ぐらい、小学生でも知っている。

その上、『土足で畑に侵入した生徒がいる』と言う話で無駄な全校集会が開かれた直後の事なので、こういう行動には余計に敏感になるものだ。

「ああ。大丈夫だから、早く来なつて」

ぶつきらばうに手招きをする有紀。お前がその言い方すると、力
ずくでもみ消すように聞こえて余計に不安になるんだが。

「ここは家の畑だから気にしないでいいよ。今は使ってもいいし
ね。全校集会の件なら関係ないし」

青森先輩からも言われると、俺達一年もようやく納得して畑に足
を踏み入れるていく。

今は使われていないのか畑の土は思ったよりも硬かった。足で掘
ろうとすれば掘れるが、普通に歩いただけでは足跡もつかない。

「本当に大丈夫なんスカねー」

などと石江がいつまでもぶちぶち言っていたが、いざとなれば二
年生に責任を押し付けてしまえばいいだろう。

先輩達が道具を出している間に、有紀が拾ってきた木の枝で畑に
ダイヤモンドを描くとグラウンドの完成らしい。とは言っても所詮
は元・畑。そこまでの広さはない訳で、ダイヤモンドを書くだけで
精いっぱいの広さ。外野のスペースなんて全く確保できていなかった。

「こんな狭い場所で何するんですか？」

柵もなければネットもない。こんなところでボールを飛ばしまく
ったら周りの畑の迷惑になることぐらい考えなくても分かる。

「主に軽めのノックかな？」

「いいッスねー」

「やる気あるねー。じゃあ、石江くんからやるうか」
「了解ッス！」

石江はグラブを手にとると、守備位置まで駆け出していく。
先程からバットを軽く素振りしているのは有紀。ホームベースの
後ろ、審判の立つ位置ぐらいの場所でミットを叩いているのが青森
先輩。そして、ショートの手前位置に石江がついた。

「よし」と

有紀がバッターボックスに入り、ボールケースを取りやすい場所
に置く。

「ちょっと、気になったんすけど、ノッカーは養島先輩ッスか？」
「そうよ。何処からボールが飛んでくると思ってるのよ？」

石江が不満そうな顔を見せると、有紀も同じような顔して返す。

「いや……まあ、何でもないッス」

ノッカーが有紀な事が気に入らないのか、シートなのにホーム返
球なのが気になるのか。石江の返事は歯切れが悪い。

「それじゃあ、いくわよ！」

石江が構えもしない内に有紀がさつさと仕掛ける。初っ端から正
面の強い弾丸ライナー。おいおい。新入部員相手にそれはないだろ
う。相変わらず自分勝手な事をする奴だ。

だが、石江も負けていなかった。反応良くそれを止めると、素早

くボールを返す。ついでに得意気な顔もセットで返す。相変わらず、鼻の穴が丸見えで気を抜くと笑ってしまいそうだ。

「いいグラブさばきしてるなあ」

返されたボールをキャッチして青森先輩が感嘆の声を漏らす。流石は経験者といったところか。

「へえ、中々やるじゃない……」

それには有紀も納得しているようだ。……と思ったが、眉をひそめていて、その顔は険しい。そして、なんだか目がマジになっている気がするのだが。

「次！」

打球の速度が上がる。素人目に見ても違いが分かる程の速さだ。それでも石江は素早かつ的確にボールを処理しては青森先輩に送っていく。

「次！」

石江が守備位置に戻るとすぐに次の球を打つ。

「次！次ツ！次イ！まだまだあ！」

何か段々速度が上がっているように感じる。石江は淡々と同様の動作を繰り返しているが、その顔からは汗が溢れだし顎から地面に零れ落ちていくのがここからでも見えた。相当キツいのは間違いないさそうだ。

「ちょっと、有紀ちゃん！いきなり飛ばし過ぎだよ！」

青森先輩が制止を掛けると、ムスツとした表情で睨み返してノックを続けていく。何を怒っているんだ。こいつは。

「二人ともすごいなあ……」

俺の隣にいる部長は止めようとする様子もなく、満足そうにノックの様子を眺めていた。しかし、部長の言つとおり二人とも凄い。やはり俺が昔やっていた少年野球とは別次元の動きだったし、俺に真似しろと言っても無理だと思う。

それから淡々とノックをこなしていく。それから数分もしない内に、ケースに突っ込まれた有紀の手が止まった。どうやら、ボールがなくなっただけらしい。

「ふん。まあいいわ……今日はこの辺で勘弁してあげる」

有紀はバットを肩に担ぎあげると、青森先輩とホームベースの間に大量に転がっているボールを拾ってケースに戻していく。これでノックは終わりのようだ。

「ありがとうござった！」

石江は帽子を取って一礼するとこちらに戻ってきた。その額からは何時間の練習した後のように汗が滴り落ちている。

「あー。僕、汗っかきなんスよね」

俺の視線に気付いた石江がそんな言い訳をしたが、明らかに有紀のオーバーペースが原因だと思うのだが。

「有紀はいつもこんな感じなんですか？」

「うーん。いつもはもつと大人しいんだけどね。本気になると歯止めが効かなくなるっていうか、何て言うか」

「そうなんですか」

「でも、普通に練習しててここまでなる事は滅多になかったと思うんだけどなあ」

部長も苦笑いをしていた。

「次！葛原！」

「はいはい」

やっぱり俺もやるんだよなあ。まあ、小学校頃は結構やつてた訳だし今でも人並みぐらいには動けるだろう。後ろに抜けるような打球は畑の迷惑だしやらないと言っていたし。

なんて軽い気持ちで守備につく。

それでも、ノッカーである有紀の顔を見るとちよつとだけ不安だ。

「じゃあ、いくわよ」

「いつでもどろろー」

有紀がボールを掴み取って、放り投げる。それから、バットを両手で持ち、振り抜……. かなかった。ボテボテとした勢いのないボールが俺の前に転がって来る。右手で拾い上げて、青森先輩にジャンピングスロー。

何だか拍子抜けである。一応経験者なんだから、もうちょっと強

くてもいいだろうに。

「素手で拾うな！グラブを使え！」

「そんな事言われたって、あの程度なら使う必要ないだろ」

「よし、わかったわ！じゃあ、本気で行くわよ！」

「え？」

今度は俺の右横をすごい速さでボールが抜けて行く。不意と付かれたとはいえ、目で追うのが精いっぱい。グラブを出すことすらかなわなかった。

「ちよつと待て！今のは無理だろ！」

と言ってる間に次の球が飛んでくる。危ない！マジで危ない！殺す気か！

「無理じゃない！もう一度！」

今度もさつきと同じ、いや更に速い球。必死にグラブを伸ばすがやはり届かない。もう少し加減出来んのかコイツは！

「早く戻る！」

「だから無理だって！もつと取れる玉にしてくれよ！」

「やり過ぎだよ！」

「またボールがなくなるよ！」

これには流石の部長も有紀の近くまで行って止めに入った。横からも援護が入ると、有紀もしぶしぶその手を止める。それを見てから、俺は一息ついて胸を撫で下ろした。

「しょうがないわね。さっきの一年ならこのぐらい取れたのに」

独り言を呟いているのか、わざと聞こえるように言っているのかは分からないが先程からやたらと不機嫌な事だけは間違いなさそうだ。

「それじゃあ行くわよ」

さっきまでの熱血ぶりとは打って違って一気にトーンダウン。それでも、ノックは続けるらしい。

ちょこんとバットに当てただけの玉が有紀の足元からゆっくりと縫い目がはつきり見える位の遅さで転がっていく。

「え？」

「ダッシュ！」

左手で招き入れるような合図をしながら声を張り上げる。

「ああ、そういつ……」

「ダッシュ！」

うるせーな！聞こえてるよ！

「遅い！もう一本！」

ボールを拾って青森先輩へ投げる。そこから守備位置に戻る前に有紀は声を荒げて、次の球を打っていた。

そして、嫌がらせのようにボールは有紀の足元を転がっている。どう見ても、ピッチャーかキャッチャーの取る球だろ……

「またかよ！」

文句をたれつつ前へ突っ込む。ボールを拾って、青森先輩にトスをした。

「遅い！もう一本！」

また同じような球が有紀の足元をテンテンとしていた。

取れないような打球を連続した後はこの連続である。そりゃあ、こういう処理の練習もあるんだけど、最初から連続してやることじゃないだろう？新人部員に対してのシゴキのつもりか？何様だよ？

「遅い遅い！まだまだ！」

それに、先の石江があれだけビバシと厳しいノックをした後で、前進しなけりやならないような弱い打球ばかりを続けられたら、まるで俺が下手糞みたいじゃないか？俺にだってプライドぐらいあるのに。もうちょいマシなやり方があるだろ？

「もう一球！」

徐々に火の付きはじめた有紀とは裏腹に、段々とイライラを募らせていく。

「もっと走る！」

「やってられるか！」

更にもう一回足元に転がるボールと広いに在るだけのノック。そこで俺はグラブを地面に叩きつけて怒りを露わにした。

「ちよつと！」

「俺は帰るからな！」

他の部員も俺を止めようとするが振り払って学校に戻ると、さつさと着替えて帰路に着いた。

家に帰った俺を待っていたものは後悔。いや、帰り道の途中から気付いていた。

冷静になつて考えてみると、怒る程の事ではなかったと思う。これじゃあ、俺の方が気の短い餓鬼みたいじゃないか。

それから、自分の部屋の窓から隣の家を見て、謝りに行こうかなんて考えたりもした。ずっと考えていた。

それでも、隣の家。有紀の家から明かりが消えるまで、ただ眺めていただけだった。

5、肉まん転嫁

あまり眠れないまま夜は明ける。休む理由もないので渋々と家を出て登校した。どうせ有紀にも謝らないといけないし、休む気何て最初からなかったがこればかりは気分の問題だ。

昨晚考えた結果、学校で有紀に謝る事にした。だが、肝心な時と方法はまだ決めていない。隣だからと言って、家に尋ねるのは流石に気が引ける。俺が最後に行ってから何年経つかもわからないぐら이다し、向こうも我が家以上に兄弟が多い。その上、あまり面識のない人もいる。誰が出てくるか分からない以上、選択肢に入れる事は難しいだろう。同じ理由で、朝に待ち伏せするのも良くない。

それ以外で有紀に会えそうな場所。結局、学校ぐらいしか思い浮かばなかった。方法は……行き当たりばったりでも何とかなるだろう。考えてないだけとは言ってはいけない。

学校が近付く。寝不足からか、前日、久しぶりの運動で疲れたからか、朝の喧騒が頭に響いて痛かった。あまり気分もすぐれない。足早に教室に入ると席に着くなり机に力なく突っ伏した。

授業が始まるまで時間はある。少し寝ようか。

「おはようツス。葛原くん」

と思ったところで名前を呼ばれた気がして顔だけを起こした。そこには、昨日見た特徴的な鼻があった。名前は確か……

「あれ？石江？」

「何を不思議そうな顔をしてるんスカ？」

「何でこんなところにいるんだよ？」

「何を言ってるんスカ？僕達、同じクラススよ」

「あれ？そうだったけ？」

こんな特徴的な顔と言うか鼻をしている奴が同じクラスにいる事に、今まで気付かなかったとは。俺もそろそろ眼鏡の着用を検討するべきか。いや別に目は悪くないけど。

寝る前の止まり掛けた思考回路でそんな事を思っていると向こうから話を切り出して来る。

「昨日の事で野球部の先輩が話をしたいから、昼と一緒に食べないかって言ってたんでスけど……」

「先輩って蓑島か？」

「違うツス。掛ヶ谷部長」

俺の反応があからさま過ぎたのか、石江はそれを即座に否定した。

「まあ、いいけど。怒られたりするのには面倒だな……」

「そういう話じゃないらしいツスよ。大丈夫。僕も一緒に行くから」
「わかったよ。昼だな」

「よかったツス！ありがとう！」

机に伏せたままになっていた俺の手を両手で掴むとブンブン振り回した。こんなことされると眠れない。俺は寝たいんだからその辺を察してほしいなあ。なんていう俺の期待をあっさり裏切って石江は話を続ける。

「ところで蓑島先輩と知り合いなんスカ？」

「どうして？」

「二人とも呼び捨てだったじゃないッスか」

確かに俺は有紀と呼ぶし、有紀は俺の事を幸基と呼んでいたと思う。多分、この前家に来た時から。いや、もつと昔からか。昨日も意識せずにそう呼んでいたのだろう。見た目とは違ってしっかりと見てるんだなコイツ。

「それで、昨日あれから大変だったんスよね」

「荒れたのか？」

「荒れたって言うか真ッ暗ッて感じてしたッス」

「真ッ暗？」

有紀が真ッ暗ッて言うのは、俺も見たことない気がするし、イメージも出来なかった。

「幸基の奴ゝ幸基の奴がゝ幸基がゝ……ッて感じッスね」

そのガラガラの声色が似てるかどうかは知らないが、恨めしそうで呪い殺しにでもきそうなB級ホラーな感じは伝わってきた。

「そんな奴には、あんまり会いたくないな」

「そうッスね」

自分の話を終えて満足したのか、石江がそれ以上突っ込んだ事を聞いて来る事はなかった。そうこうしている内に、一睡もできないまま授業が始まってしまうのだが。

どうせ、授業が始まったらほとんど寝てるから関係ないか。

*

昼休み。

我、先に！と群がる生徒達によって購買は異様な熱気に包まれている。全く暑苦しい事この上ない。素早く買い物を済ませると、そんな購買抜け出して少し離れた場所へ。木陰に置かれた静かなベンチで掛ヶ谷部長は俺達を待っていた。

もちろん、そこに有紀は来ていない。

俺が執拗なまでに辺りを見渡していたので気付いたのだろう、石江はいないと何度も繰り返している。しかし、そこは入念にチェックを入れるべきだ。正直言つて、掛ヶ谷部長よりも有紀に話があるのだから。

軽く挨拶をしてから、部長は話を始める。それは特になんてこともない話だった。

簡潔にまとめると、部員が集まる目途は立っているという話。有紀が厳しすぎて部員が辞めてしまった例もあるので、有紀にはキツく言っておくという話。それから、ただ入部してくれるだけでいいと入部届けを渡されておしまい。それだけだった。

そして、チャイムが鳴つて授業がはじまり。終わる。やがて放課後。俺は帰路に付く生徒達を眺めながら、石江とともに部室に顔を出す。

扉を開けて挨拶をしながら中に入ると、そこには掛ヶ谷部長、青森先輩それに有紀。二年の先輩が三人揃っていた。

有紀がこちらに気付いて口を開くと、当然のように俺に文句を言ってくる。

「何？また来たの？」

「いたら悪いのか？」

部長は「キツク言っておく」などと言っではいたが、大方予想通りの反応だ。こんな風な対応されたら誰だって辞めたくなるだろうに。

「まあまあまあ、やめなよ」

部長が間に割って入ったと思うと、そのまま有紀を外に連れ出して行ってしまう。インドア派で一番大人しそうな部長がここまでするとは思わなかった。一応、部長やってるだけの事はあるとでもいうのだろうか？

「本人も虐めたくてやってる訳じゃないと思うんだけどね。部長が説教するらしいから、今は任せておこうよ」

二人が出て行った後で、青森先輩が苦笑いをしながらフォローを入れる。それから俺達は部活の準備をはじめた。準備といっても着替えだけ。活動内容もストレッチとグラウンドの周りを走っただけだった。

日も沈みかけ、空の色も鮮やかさを失いはじめる。そろそろ上がる頃になって、ようやく有紀と部長が戻って来た。そして、有紀と話す事もなくそのまま解散になるのだった。

*

いつもと同じ畑の真ん中を突っ切るだけの帰り道。とは言ってももう日も落ちており辺りは暗い。ついでに足もいつもより重たかった。部活の後なんてこんなものだろう。

自転車の明かりを付ける発電機の音だけがよく響く。帰宅部の中にはあまり聞くことのなかった音だ。

「何でついて来るのよ!」

と、前方から怒ったような声がする。俺の目の前には有紀とその自転車。

先程、こちらから横並び話しかけようとしたら、横から蹴飛ばされそうになったので大人しく後ろを走っていた。結局、有紀の機嫌がよくなるなんて事はない。

「仕方ないだろ。家が隣なんだからさ」

先を行く有紀がしきりにこちらの様子を気にしているが、同じ部活で同じ時間に解散して同じ方角を目指して帰れば、こうなる事は考えなくてもわかるだろうに。

そんなに嫌だったら、速度をあげて振り切ったり、一旦止まって先に行かせたり……

ガシャン……ッ

俯き加減で聞こえない程度で声で呟いていると、俺の自転車の前輪と有紀の自転車のキックスタンドがぶつかっただようた。

「あぶねーな!」

「危ないのはそっちでしょ! 信号、赤じゃない!」

顔を上げると確かに赤信号が見えた。ブツブツ言っている間に畑道を抜けていたらしい。

「ああ、ホントだ」

「何が『ああ』よ！全く、危ないったらありやしない……」

有紀は視線を前方に固定したまま文句を言ってきた。何処となく歯切れが悪い。

やがて信号が変わると、今度はこちらを向いて、

「私はコンビニ寄ってくから、付いてこないでよね！」

怒ったりするのかと思ったら、どうでもいい報告をしてきやがった。いや待てよ。もしかしたら、コンビニなら人も少ないし落ち着いて話ができるかもしれない。後を追って、信号の先にあるコンビニに自転車を止める。

有紀はこちらを人睨みした後、何も言わずに自動ドアを潜っていく。俺も黙って中へ入る。有紀と話す前に、まずはレジで一仕込み

「肉まん二つ」

安直かもしれないが、食べ物で機嫌取るのは定番出し間違いではないだろう。

会計を済ませたら有紀のいる雑誌コーナーへ。

「なあ、ちよつといいか？」

「何よ？」

週へのページをパラパラと捲りながらではあるが、一応返事はあ

った。

「ほい」

肉まんを一つ差し出したが、やはり受け取ってもらえずにそっぽ向かれてしまう。もちろんそれ位の事は想定済みだし、これで諦めるつもりはない。

「俺だつて野球やりたいんだから」

「本当に？」

雑誌を棚に戻す。案外あっさり喰い付いてきた。部長が説教したところで、そこまで効果があったとは考えにくいし部長のおかげとは思わないが、今は感謝しておこう。

「本当に野球がやりたいの？」

「もちろん。昔からやってきた事だしな」

有紀が俺の顔を覗きこむ。俺も真っ直ぐ有紀を見て返した。その言葉は嘘ではない。だけど、俺の言葉は遊びとしての意味合いが強かった。有紀の思っている事は分からないが、そこにはきつと大きなズレがあったと思う。

少しの沈黙。俺の心を見透かそうとする瞳。

こういう時間は相手がなんであろうと緊張するしドキドキする。目を合わせる事の魔力というかなんというか。冗談の一つでも言うて逃げたくもなる。きっと自分の言葉に自信が持てないのだろう。

「わかったわ。一つだけ約束して」

有紀の方が先に視線を外すと、固まったままの俺の手から肉まんを奪っていく。今、それを取る事に何の意味があるのか？

「練習はサボらない事」

「ああ」

指を付き立ててみせる有紀をもう一度真っ直ぐ見返して頷いた。

「2つ」

あれ？1つじゃなかったのかよ……何て突っ込みたくもなるが、有紀は真面目な顔をしている。ふざけてる訳ではなさそうだし、今はやめておいた方がいいだろう。

「夢を絶対に諦めない事」

「は？夢って？」

「え？……甲子園よっ！甲子園！」

一瞬、間があつたように感じたのは気のせいだろうか？

「いい！？絶対行くわよ！甲子園！」

「分かったから、コンビニでそんなに騒ぐなよ……」

幸い他に客はいなかったが、レジの店員はこちらをガン見している。俺の一言でそれに気付いた有紀の顔が爆発でもするかのように一気に真っ赤になるのが見えた。

「幸基のせいで恥かいたわ」

一気にトーンダウン。俯き加減のその姿にちょっとだけニヤけてしまう。いい気味だ。

「俺のせいなのか？」

「場所を考えずにこんなところで謝ろうとする方が悪いに決まっているじゃないつ。それに……」

「それに？」

「もう5月何だから、肉まんっていう季節でもないでしょうに」

文句を言ってから半分に千切って口に放り込む。

別にいいだろ。年中、肉まんがうまかろうと誰も損しないし。つか、肉まんは何も悪くないだろ。何で肉まんにまで文句つけるんだよ。

後日、俺は正式に野球同好会の一員となった。

6、 必要ないが基礎スペック

今更だが、南桜高校には校舎が二つある。そのままのネーミングだが、それぞれ北校舎、南校舎と呼ばれている。どちらも屋上付きの四階建てだ。北校舎には一、二年の教室があり、南校舎には三年の教室と職員室や視聴覚室といった特別教室がある。

ちなみに、俺達一年生の教室は北校舎の一階と二階に分かれている。そして俺の教室は一階。なので二階に行く事に必要性はなく、今まで二階にいったことはなかった。多分、そういう人は俺以外にもいると思う。

しかし俺は今、北校舎の階段を上っていた。そこを上り終わるとそこはまだ到達した事のない未知の世界……そんな訳もなく、一階と同じ変わり映えのしない光景がそこにある。知ってはいたが、つまらないものである。

こんなことを確かめる為に二階に来た訳ではない。やはり俺が初めて二階に来るからには、歴とした目的がある。

「なんで俺達が行かなきゃいけないんだろうな？」

「いいんじゃないッスか？ 同学年だし僕達の方が話やすいと思うッスよ」

隣の石江に少しだけ愚痴る。目的。それは野球部員の勧誘だ。

「でもなあ。俺、勧誘の仕方なんて分からないぞ」

「大丈夫ッス。向こうは経験者で、全国でも名の知れた選手らしい

ツス」

「それは、部長からも聞いたけどさ」

そして、ご丁寧ターゲットまで決まっている。

「そんな選手が何の事情もなくこんな部活のない高校に来るのかな？」

「それはわからないけど、中学で世代ナンバーワン投手と言われた事もあるらしいし、僕は楽しみツスよ！対戦してみたいツス！」

しかも、そのターゲットはかなりの有名人らしい。正直言って怪しいもんだが。

なんか燃えてるよなあ。やっぱり、スポーツマンってのはこうあるべきなのだろうか。なんて思うが、俺にはそういう要素は見当たらない。

うーむ。小学生の頃はあつたんだっけ？

「そういえば、石江もそこそこ凄かったんだろ？」

「本当にそこそこツスけどね」

「どのぐらいなんだ？」

「シヨートで四番になるぐらい」

学校で一番うまいとかそれぐらいの才能なのだろうか。そう言う話を聞くと、益々何故この学校に来たのか聞いてみたくなる。

「ふーん。ところで七組ってどっちなんだ？」

「え？」

「いや、二階来るの初めてだからさ」

「二階デビュースね。仕方ないから説明してやるッス！右側の端が六組で、そこから順番に七組八組……で、反対側の端が十二組ッス」

右手で指差しながらの説明を聞いてから、感想を一言。

「一階と同じようなもんだな」

「いやまあ、普通そうじゃないッスか？」

「言われればそうだな」

「お、この教室ッスね」

そうこう言っている間に目的地に到着。学校の廊下なんて狭いものだ。

「名前は何ていったっけ？」

「璃久原一馬ッスよ。それぐらいはちゃんと覚えておくッス」

一年七組、璃久原一馬のいるであろう教室を覗きこむ。そこにはもう担任の姿はなく、何人かで纏まって他愛のない雑談をしているグループがいくつか。教室内に残っているのは二十人程、早い人はもう部活に行ったり帰ったりしているのだろう。

「で？誰がそうなんだ？」

「え？聞いてないんスカ？」

「顔は聞こえないけど」

「有名人ッスよ！有名人！マジで知らないんスカ？」

「うん。だから、誰か聞いてるんだろ」

「あゝ……そうなんスカ……実は、僕も知らないッス」

少しの間をあけてから恥ずかしそうに頭を掻く石江。どうしよう

もないな、これは。

「帰るか」

「あー待った！待つつスよ！誰かに聞けば分かるはずッス！」

石江には構わず来た道に戻ろうとするが、

「待てよ」

見知らぬ男子生徒に声を掛けられて足を止めてしまう。

その生徒の身長は俺や石江よりもワンランク高い感じ一八〇センチ以上あるだろう。髪型はネープレスのショートマツシールドムボブ。それに茶髪。目元はしっかりしているが、どちらかというとチヤラくて頭のネジが緩そうな印象。プロの選手にもこんな髪型でイケメンハーフな凄い成績の投手がいたような気もする。そこにいる男子生徒は純日本人だが。

「俺に用があるんだろ？」

「その前に誰だよ？」

「有名人だよ。有名人」

目の前の男が自分の親指で自分の胸の辺りトンツと叩いた。ちょっとナルシストでも入っているのだろうか。

それでも、言いたい事は大体の事は理解できた。こいつが俺達が探してる璃久原一馬だということだろう。

「自分で言うか？普通」

「仕方ねーじゃん。ちょっと前までは、全国から視察に来たり、TV局が押し掛けて来たりして大変だったんだぜ？」

すごいのはわかるが、得意気に語るあたりがやや癪に障る。やっぱり、ナルシスとだな。

「誰ツスか？知り合いツスか？」

まだ気付いていない様子の石江が頻りに聞いてくる。お前は察しいいのか悪いのかよくわからない奴だな。

「璃久原一馬だろ。俺達の探してる奴」

「正解セーカイ」

その行動に何の意味があるのかは知らないが、人指し指を立ててクルクル回して見せる。

「おおおおおおお！それなら話は早いツス！是非、野球部に入ってほしいんス！」

「野球部？悪いな。俺、肘怪我しちゃってもうできねーんだわ」

飛び付こうとする石江を片手で制すと、考え込む様子もなく飄々とそう告げた。ものすごくアッサリと断られてしまう。

「おい、一馬ー置いてくぞー！」

廊下の向こうから声がする。数人の男子生徒がたむろしており、その内の一人が手を振っていた。

「あーわかったよ！」

「友達待たせてるんでわりいな」

「あー！まだ話は終わってないツスよ！」

その生徒に返すように、璃久原は手をヒラヒラさせながら、俺達にさわやかな笑みを残して去っていく。まあ、あれだな。メディアが好みそうなタイプだとは思う。

「完全に器が違うな」

隣で肩を落としている石江を見ながらポツリと漏らす。

「どういう意味ッスか」

「何でもない。やっぱり断られたけど、どうするよ？」

気が付くと廊下に残されたのも俺達だけになっていた。教室や廊下に残っていた生徒の数も激減している。いつまでもここにいる意味もないだろう。

「今日はもう話するのも無理そうッスね。部室に行きますか」

「そうするか……」

俺達も来た道を引き返す。その廊下はすっかり閑散をしていた。

全く成果も出せないまま、俺の二階デビューは終わった。いや、二階デビューと成果に因果関係はないのだが。それ以前に二階デビューという命名もどうかと思う。

*

「掛ヶ谷部長！成果はあったッスか！？」

「うーん。とりあえず、考えてはくれる見たい。一先ず保留ってところかな？」

部室にはいつものメンバー。部長、青森先輩、石江、有紀、俺が集まっていた。

俺達が璃久原の勧誘をする間に、部長達は幽霊部員に復帰を呼び掛けると言っ話になっている。

まずは部長達に報告を聞くと、今度は俺達があるのま話を話した。

「全く、だらしないわね。部員の一人の勧誘も出来ないの？」

何処から持ってきたのか分からない木製の椅子。小学校とかにあった、『気の部屋』辺りにありそうな感じ。その椅子を逆向きにして大股開きで座っていた有紀がまた文句を言ってくる。

「何だよ、お前だって成果なしのくせに」

もちろん、スカートの下にはジャージを穿いているので見えるものは何もない。見えたところで、誰も見ようとはしないだろうが。

「私の成果ならここにいるじゃない」

真っ直ぐに俺を指差した。そういえばそうか。

「そうよ。私は一人連れて来た。だから、今度はあんた達が一人ずつ連れてくるの。そうすればピツタリなんだから」

俺と石江を交互に指差しながら上から目線でそう言っのける。

新入部員にノルマを課すなんて横暴だろうに。何処のねずみ講だよ。

こんな感じで、数日間大した成果も上がらないままただ時間を消費していく。

今更言つのもなんだけど、やっぱり野球部創部なんて諦めた方がいいと思うのだった。

7、バッティングセンター破り

放課後を告げるチャイムが鳴り響く。程なくして帰宅部の生徒達が群れをなして学校から逃げるように飛び出していく。

今日の俺達はその群れ交じって帰路についていた。部活の事も気にしなくていい。久々のこの感覚。なんと甘美なものか。

しかし、家に帰れる訳ではないのが残念なところだ。

学校出た直後から、いつもとは真逆の方向。北へ進路を取る。そこから五分程で土臭い畑道を抜け、駅前を目指す一団と共に自転車走らせる。駅が近付くにつれ背の高いビルが増えて行く。一軒家ばかりが立ち並ぶ家の方角とは全く違う光景だ。とても同じ市内とは思えない。

駅前を通り過ぎると、知らない景色見た事のない場所に足を踏み入れて行く。まあ、隣には石江がいるので帰りの問題はないのだが。そして、高校からここまで続いていた大集団も姿を消した。先に行く集団は四人組のグループだけになった。知らない奴が多いが知ってる奴も一人だけいる。璃久原一馬である。

その日、俺達は璃久原達のグループと遊ぶ約束をしていた。これは部活をサボったわけではなく勧誘活動の一環。事前に報告してある。全く持って問題ないのだ。

「何処まで行くんだ？」

「今日はバッティングセンター。もうちょい先かな」

先に行く集団の一人が答えた。

「これは思ったよりすんなりいきそうッスね」
「そうかもな」

その回答を聞いて、今度は石江とボソボソとそんな話をする。こいつはニヤついてる顔も気持ち悪い。

あの後一週間ぐらい石江は一人で勧誘を続けていたらしい。俺は行っていないので知らないが、今日は向こうから誘ってきたという話で、「入部してくれるかもしれないッス！」と石江は朝から意気込んでいた。

「あ、ブレザーの中で何か光ってないッスか？」

石江に言われて気付いたが、ブレザーの下に着てるシャツの胸ポケットに入れてある携帯のバイブっていた。有紀からの着信だ。

『こらー！何処でサボってんのよ！』

いきなり携帯を投げ捨てたくなるような怒声。

「サボってねえよ！部長に連絡してあるだろ？じゃあな！」

怒鳴り返してから、一方的にぶち切る。だが、それから数分もしない内に再び電話を掛けてきた。

「なんだよ？」

『で、何処にいるのよ？』

「それは部長に聞いてくれって……」

『遊びに行くとして言っ てなかったけど？』

それは端折り過ぎですよ、掛ヶ谷部長。

俺はこの後、璃久原勧誘の件と行き先について事細かに説明する羽目になったのだ。信号待ちの間には「彼女からの電話がしつこいな」なんて璃久原の集団からもからかわれてしまう始末だ。彼女じゃないし。それに有紀の声は大きすぎて丸聞こえなんだよ。全く……

*

駅前を過ぎてから更に十分程。山の麓になろうかと言う辺りにバツティングセンターがある。

昔はゴルフの打ちっ放しだったらしいが、景気が悪く去年あたりからバツティングセンターに変わったらしい。今の時代にバツティングセンターが流行るのかと聞かれたら、首を傾げたくところだが。

その脇に自転車を止めると景気のいい金属バットの音が中から聞こえてきた。中に入るとまずはゲームセンターのコーナーに向かう予定だとか話をしていると、

「ふ……。来たわね」

金属バットを肩に担ぎ、貸出のヘルメットを律儀に装備したジャージ姿の女が、ゲーセンの入口付近で俺達を待ち受けていた。その女とは……

「璃久原一馬！」

有紀である。しかも上下学校のジャージ姿で。その上何故、中学のものを着てくるんだ。つーか、いつの間にここまで来たんだよ。

「私と勝負しなさい！」

肩からバットを降ろすと、バット先をグループの中で一番背の高い大柄の男に向けた。

（何かかつこいいツスよ！蓑島先輩ッ！）

（俺は恥ずかしいのだが……）

風が吹き抜ける。もう五月だというのに、今すぐ帰りたくなるような寒さだ。これも単に有紀のせいなのだが。

「あのさ。璃久原は俺なんだけど」

その隣のチャライ男が手を上げる。やっぱり、パツと見たと野球やりそうな容姿してないよなコイツ。

「あ、間違えた。ごめんねー」

と平謝りし、最初から仕切り直し。やり直さなくても別にいいと思う。

「バットぐらいは握れるでしょ？今すぐ私と勝負しなさい」

「まあ、いいけど」

「折角のバッティングセンター何だし、勝負はもちろんこれよね」

持っていたバットで一回大きくゆったりとしたモーションで素振りしてみせる。

また言ってるよ、この女。それと、人前でバットを振り回したらいけないんだぞ。小学生でも知ってる常識だ。

「わかったよ。お前が勝ったら部活に入れと言う話だっけ？」

「物わかりがいいわね」

「あれ？勧誘するって気付いたんスか？」

「お前は一週間何の目的で通ってたんだよ」

こちらでくだらない話をしている一方で、本題は進んでいく。

「それじゃあ、俺が勝ったら何がもらえるのかな？」

「私に出来る事なら何でもするわ。一億寄こせとか絶対に無理そうな事以外なら」

「じゃあ、セフレとかどうよ？」

「わかったわ」

軽くうなずく有紀とは対称的に、俺の隣では石江が取り乱していた。

「セフレってあれッスか！？セレブの派生系で。男性とあんな事やこんなことするのが日課な人！毎日、毎晩、いつでも、何処でも、誰とでも。時間も場所も気にせずに……ッ」

「お前は落ち付け」

このままじゃ放送禁止用語どころじゃ済まない気がしたので、頭の天辺に拳骨を一発入れて黙らせておく。

もつとも、石江の事など誰も気にとめていなかったようだ。

「ルールは簡単。あそこに赤い丸が見えるでしょ？そこに当てるとホームランになって景品がもらえるの。ここの景品は一日の無料券一枚で……」

「ホームラン競争かね」

「ゴホンッ……その通り。どっちが先に当てるか勝負よ」

「ふーん、一対一な訳？」

「そのつもりよ。こいつらは役に立たないし」

「ま、いいか。受けて立とう」

「場所・球速は自由。好きなところを選んでいいわ」

一行は有紀を先頭にしてゾロゾロとバッティングセンターの中へ入っていく。何だか完全に置いていかれてしまったようだ。あのジャージの仲間だと思われるのは恥ずかしい。このまま帰ってもいいのだろうか？

「あんた達も早く来なさい！幸基！あんたが審判やるのよ！」

外でボーツとしていると、有紀が戻って来て無駄に怒られてしまう訳だが。

*

二人が隣り合ったバッターボックスに立っている。右に璃久原、左が有紀。どちらも左利きらしい。面倒臭い奴らだ。

後は俺が合図をしたらスタート。その他のギャラリーは後ろで、

勝負が始まる瞬間を待ちわびていた。

「いつでもいいわよ」

「こっちもOK」

互いに準備が出来た事を確認すると、俺は右手を上げて、

「スタート！」

風を裂く音がするぐらいの勢いで右手を降ろす。その直後だった。

パンパカパン！

子ども用のおもちゃにありそうな安っぽいファンファーレが店内になり響く。同時に勝ち誇ったように鼻を鳴らして見せるのは有紀だった。コインを入れようとする体制のまま璃久原は啞然とした表情でその先を眺めていた。

どうやら、勝負あったということでもいいのだろうか？

「え、え」と……。勝者、有紀！

*

「約束よ」

「なんか面白くないけど、しゃーねーか。わかったよ」

そして、あっさりOKを貰うとその場は解散となる。

隣の石江が「僕の努力って何だったんでスかねー」なんてぼやいていたが、全く無だった訳名じゃないと思うぞ。

「折角だし、もう少し遊んでから帰るかなー」

璃久原達が白けた様子で去って行った後、有紀は再びバッターボックスに戻った。そして、順調にホームランを量産し続けていく。

「有紀って、こんなにうまかったんだな……」

「すげーッスね」

ホームランのファンファーレを鳴らす度に何処からか歓声が上がる。

「おい、あの中辺中のジャージは間違いないぞ……」

「あれが噂のバッティングセンター破りって奴なのか？」

その数がかさんでくると、有紀の近くで見てい売るギャラリーから不穏な囁きが聞こえてきた。ちなみに、中辺中とは俺の通っていた中学の名だ。

「二つ名って奴でスカ！？うおおっ！有紀先輩、かけえッス！マジ最高ッス！！」

それを聞いた石江が興奮気味に叫ぶ。

そこから加速度的にギャラリーが増え始め、ホームランを打った時の歓声はどんどん大きくなっていく。石江も先頭に立って恥ずかしい事を叫ぶのはやめにしようか。

「もう帰ってもいいのかな……」

俺は隅に置かれたベンチで一人ごちていた。

日も落ちる頃、「一枚でいいですか？」と遠慮がちに尋ねる店員を睨みたおして無料券を十数枚貰って戻ってきた。それで、「元は取れた」と自慢気に言われても対応に困るのだが。

8、**集まる時はアッサリと**

「えええええええええええ！？断られたあああああああ
あ！？」

部室に複数の悲鳴が共鳴し響きわたる。そのポリウムと迫つて来る奴らの圧力ににやられたのか、部長は耳を塞ぎ部屋の隅で丸くなつてしまった。

まず先にこうなるまでの経緯を説明しよう。

先日の件で、璃久原一馬とその連れの一人、計二人が入部した。それによって、野球同好会は幽霊部員を含めて部員が十人ピツタリになった。有紀が言うには担当教員も前々から決まっていた様なもので、部員をそろえたらOKと言う話になっているらしい。

今ここに創部の準備が整ったのである。

そんな訳で、早速部長が部として認めてもらうための許可申請を行った。だが、先程ハモったように断られてしまったのである。

理由は、去年から同好会として活動していた筈だが活動経歴が全くない事が挙げられた。後、幽霊部員が多い事もばれているらしい。そんな状態で高野連に登録して、公式戦に出られるのか云々と言われたようだ。

しかし、ようやくここまで来たのだから、このまま引き下がる訳にもいかない。

担当教員の先生が何とか食い下がって交渉した。そして激しい言

い合いの末、一つの条件を提示されたのだ。その条件を満たす事で、部として認めてくれると言う。

そして、その条件とは『練習試合で勝利すること』だ。部の事情をよく知らなかった担当教員がその条件を飲んでしまったと言う話だ。

その上、最悪な事に練習試合の予定までもう組まれているらしい。試合は一週間後。今週末の日曜日。これまた急な話だ。

現在、幽霊とマネージャーを除いた試合に出られるであろう部員は六人。バスケの試合は出来るが、野球をするにはまだまだ人数が足りない。野球は九人でやるスポーツだ。

練習試合を成立させるためには、後一週間で三人を勧誘しなければならなかったのだ。

しかも、これまで行っていた知り合いに声を掛ける方法は今もうネタ切れ。璃久原にも声を掛けるような仲のいい相手はもう残っていないと言う。つまり、何か別の方法を考えないといけない状態。何処となく絶望的な雰囲気も漂っている。

「とりあえず、私が出るとして後二人ね。何とかして探さない」と

「それっていいんスか？」

「普通に駄目だと思う」

「うんうん」

それぞれ有紀に突っ込みを入れる。いうまでもないが、硬式野球部の試合に出れるのは男子だけである。

「うるさいわね！要は女だってばれなきゃいい訳でしょ！」
「それは隠せないだろ」

女の子らしい部分を指差して一言。出るところは出てるし、こう見えて案外女らしいのだ。無論、直後に拳骨が振って来る訳だが。

「いてて……褒めてるのに……」

「ただの下ネタじゃない！こんなので、喜ぶ奴なんていないわよ！」
「……人前でよくやるよ」

周りから溜め息が漏れていたのは、何故だろうか？

それはさておき、その後も有紀は自分が出ると言って聞かなかったが、

「そんなその場凌ぎをするよりも、無難に人数確保するべきだよ」
「練習試合で通ったところで、夏の予選は出れないからなあ」

青森先輩と璃久原にまとめられると、有紀の事は放っておいて部員探しを再開するために解散になるのであった。しかし、具体的な方策もないままなので、校内をフラフラしてから帰るだけ。全く進歩のないまま一日を浪費してしまうのだった。

*

翌日の昼休み。部室の前。俺の手には部室のスパキーが握られている。食事する場所を取るのが面倒な俺はここで食べている事が多くなっていた。

今日は石江とのジャンケンに勝ったので、石江が買い出しに購買へ行っている。一足先にこちらに来たのだが、そこで鍵が開いてい

る事に気付いた。どうやら先客がいるらしい。

「有紀？何してんだ？」

扉を開けると、そこには床に寝転がって有紀がいた。その周りにはマーカーペンが散らかっている。何かを描いているらしい。

「募集の紙よ。部員募集の張り紙を作ってるの」

その横までいって覗き込む。そこには、人、バット、グローブなど少女漫画チックなイラストで描かれていた。

「ふーん。意外に絵うまいんだな」

「見るなッ！」

至近距離からキャップをしてない油性マーカーが飛んでくる。そんな気はしていたので、危なげながらも避ける事が出来た訳だが、顔についたら如何するつもりだったんだ。

「あぶねーな。しかし、そんなので効果あるのか？急いでるのに」

「大丈夫よ。ここに急募ってかいてあるわ」

紙をトントンと指差すが、もう俺からは見えない位置に移動している。そんなことされても、わかんねーよ。

しかし、これまでが手当たり次第声を掛ける作戦で、切羽詰まったら紙で募集を掛ける作戦か。普通に考えたら順序が逆な気もするが。

「何処に張るのか決めてるのか？」

「ん？そんなのは適当でいいでしょ」

「え？許可とか必要なんじゃないのか？」

「取ってないわよ。そんなもの。大体、そんな事してたら間に合わないかもしれないじゃない」

まあ、言ってる事はわかるし、別の案がある訳でもないのだから以上は突っ込まない。

「そんなところで呆けてないで幸基も手伝いなさいよ」

「わかったよ。何を手伝えばいいんだ？」

「だから見るなと言っとうろくにッ！」

近付くと、今度はどつかれてしまう。見るなという事と手伝えという事を両立する。一体、どうすれば良いのやら。

名案もだせないまま、部屋の隅で寝転がった有紀の後姿、スポーツ用の地味な下着を眺めていた。

その後、やってきた石江があからさまをした所為で、有紀が暴れるのだが、その話は……疲れたとだけ言っておこう。

*

金曜日。

とうとう新しい部員も見付からないままこの日が来てしまった。世の中とは無情なものだ。何事も思い通りにはいかないのだよ。

これも定め。野球部の件は潔く諦めようじゃないか。

……なんて、半場ノリノリで部室へと足を運ぶ。別に野球部がイ

やだとか嫌いな訳じゃない。やはり、俺には帰宅部の方が性に合っているだけの事。それは仕方のないことなのだ。

「ちわー」

部室の戸を開ける。そこには見慣れない顔があつた。それも四つも。一瞬部室を間違えたのかと勘違いをしてみうが、そこには見慣れた顔もある。入口の扉には看板もない。間違いなく野球同好会の部室だ。

俺が最後だったようで、これで部員が集まると俺達の時のように自己紹介が始まった。どうやら、ほぼ全員新入部員らしい。

河岸雄大。一年。璃久原の知り合いで、璃久原と一緒に入部した生徒だが、部室で見たのは今日は初めてのような気がする。

身長が高く百八十後半か百九十あるかもしれない。璃久原も背が高いがそれ以上だ。そして、堅もいい。脂肪が多い気もするが。顔は丸顔で目は細い。オマケで福耳だ。なんというか、大仏に似ている。頭がパンチパーマだったら間違いなく大仏顔だ。

「え、ええっと……。何で、みんなこっちを見てるんだろう？」

堅のいい大仏顔は自己紹介もせずにオドオドしていた。

「ああ、わかった。ここに立っていると部屋に日が射し込まないんだ。きつと」

後ろに窓がある事に気付くと、そこから二、三步横へずれる。いや、そうじゃないだろう……

「さつさと自己紹介しろよ。木偶の坊」
「いたっ！」

璃久原が頭を小突く。こんな感じで大仏顔の自己紹介は遅々として進まなかった。正直、運動も出来そうにないし使えそうにないなという印象。大仏よりも木偶の坊の方がしっくりくる感じた。

次の二人は二年生だ。有紀の張り紙を見て来たらしい。こういう方法で部員集められるなら最初からやれば良かったのにも思ったりもする。

三宅大地。野々村総一郎。どちらも同じクラブで少年野球をやっていたらしい。しかし、それ以降はやっていなかったと言う。つまり、俺の同じぐらいの経験値になるだろう。

最後は、細田伸彦。三年。幽霊部員の一人だが、部長が何とか説得してここまで連れて来たらしい。乗り気ではなさそうだが、練習試合には出てくれるようだ。

これで合計九人。有紀を含めれば十人になる。

練習試合二日前。大した苦労もなく部員は揃い、練習試合の体制は整ってしまったのであった。

*

その日、解散後。部室には俺と有紀、石江の三人が残っていた。有紀が張り出した部員募集の紙の後片付けをし、それを終えてゴミ置き場から戻ってきたところである。

「おつかれさま」

「お疲れッス」

「おつかれ。アンタらは先に帰っていいわよ、私は先生に明日と明後日の事言わないといけないから」

「おお、そういえば、顧問の先生って誰になるんスか？」

「知らないの？」

「知らないな」

「知らないッス」

「呆れた。何ヶ月部活やってんのよ……」

見事にハモった俺達をジト目で見られても、知らないものは知らないし、会ったことない人は会ったことないのだから仕方ない。

「しょうがないから教えてやるわ。蓮子先生よ」

「ええー！マジッスか！？マジなんスか！？」

それを聞いた石江が叫びながら有紀に近付くと、その両肩を掴み前後に激しく揺さぶった。

「寄るな！この豚！」

そして、殴り倒される。『豚』と言うのは女王様気分からか、見たまんまなのか？いや、そんな事よりも。

「その蓮子先生って誰なんだ？」

「えええ！！知らないんスか！？知ってる筈ッスよ！数学の先生ッスよ！あの先生！」

即座に復活した石江が、今度はこちらに突進してくる。

ああ、あれか。名前で言われたので分からなかったんだ。

頼澤 蓮子。小柄で顔も若く、「制服を着たら生徒と見間違える」などとてもよく言われている先生で男子生徒からの人気は圧倒的らしい。えーと、他には……

「二十七だっけ？」

「真っ先に年齢が出てくるその神経を疑うわ」

9、早い者勝ちではないらしい

練習試合前日の土曜日。俺達、野球同好会は学校で集まり会議をしていた。

場所は部室ではなく、二年の教室。部室にはまだ机も椅子もないし床も堅い。やっぱり、そういったものの揃っている教室で会議した方が効率的だろうという事で、ここを使っている。

机を動かしたりはせず、その辺の椅子や机に自由に座っていた。現在は雑談中だ。蓮子先生だけはチョークを片手に今日の題目を黒板に書く作業をしている。小柄で背は低いと言っても、黒板に文字を書くのに苦労するほど極端ではない。

それにしても、華奢な身体だ。身長百五十センチに体重四十あるかないかぐらい。ゆったり服のせいかもしれないが、ボディラインもはつきりせず胸もないように見える。一部の熱狂的ファンがいるのも、まあ、理解出来る。

「あ、やっぱり。トランプとかほしいよな」

「いいねえ。部室でトランプ。青春っぽくね？」

「それをやるなら、合宿とか修学旅行じゃないか？」

こんな会話は、会議の議題とは何の関係もない。

発端は、璃久原の「部費でどんなものを買えるか？」と言う質問である。その話題に乗ったのは部長であり、始めの頃は真面目な話をしていた。しかし、段々と話が逸れて来ている。それは別に構

わないのだが、その隣で怒りのボルテージを溜めている人がいる事にはそろそろ気付いたほうがいいだろう。

「部費も！トランプも！合宿もっ！まだ先の話じゃ！先に決める事があるでしょうが！お前ら！」

ぶちキレて椅子を投げつける……と、まではいかないものの、持ち上げた時点で十分に危ない。しかも、石江が座ったまま持ち上げてるし。なんて馬鹿力だ。

持ち上げられた石江の表情もいつも以上に鼻が開いていて面白くはあるが、それ以上に危険だ。部長や青森先輩が必死に止めている内に、

「先生ー。はやくはじめましょーよー」

と機転を利かせ他方面に援助を要請してみたものの、

「チヨーク……。チヨークが折れちゃった……」

「先生？」

「驚いたら、折れちゃった……まだ買ったばかりで新品なのに……」

折れたチヨークの先端を、今にも泣き出しそうな瞳で見詰めながら小刻みに震えている。そんな姿は、とても二十代後半には見えなかった。

「ダメだな、こりゃ」

俺は援護要請を諦めると、少し離れた場所に避難し事の成り行きを見守ることにした。

＊

有紀を何とか説得して石江を投げつけるといふ事態を阻止したら、
気を取り直して会議再開。先生に代わり、今度は有紀が教壇に立っ
ている。

「それではまず、守備を決める訳だけど。誰か希望のある人はいる
？」

メインの議題はそれである。明日の守備位置決めだ。総合守備の
練習が出来る時間がある訳でもないし、所詮は気休めだが、当日に
なってから考えるよりもいくらかマシだろう。

「はいはい」

真っ先に手を上げたのは璃久原だ。他にはいないようなので、有
紀はそれを指名する。

「あまりボールを投げたくないから、俺はファーストで」
「わかったわ。他には？」

黒板に書き込みながら手際よく進めて行く。

「じゃあ、俺はショートがいいッス！」

「外野がいいなあ」

「誰もやらそうだし、キャッチャーでいいや」

そこに石江が続くと、次々と守備位置を指名していった。順調に

埋まり、残りは俺と河岸。

「じゃあ、僕も外野……」

周りの様子を窺いながら河岸が手を上げた。

「それじゃあ、俺が残るか」

最後に残った守備位置を確認するために黒板に目を向ける。部員な名前が書き込まれたダイヤモンドの中心にぽっかりと穴が開いていた。

「もしかして、これって……」

続きを言おうとした時、激しく教壇を叩く音が室内に響く。両手を付いて顔を伏せている為その表情は覗えないが、有紀が機嫌を損ねたのであろう。その理由もなんとなくわかる。

「何でピッチャーが余るのよ！おかしいでしょ！？」

まあ、その怒りは最もではある。他のポジションは置物にグロブ持たせておけば試合は出来るかもしれないが、ピッチャーはそうはいかないのだ。俺なんかにはやらせてはいけない。

「テストよ！今からピッチャー決めるテストをやるわよ！」

有紀が今度は教壇をグーで叩いてみせる。特に反論する者もなく、済し崩しにピッチャー適正テストが始まるのであった。

行き当たりばったりが過ぎる気もするが、明日が本番なのでこれ

も已む無しの展開か。

*

今日もグラウンドは使えそうにないので、畑のグラウンドに全員集合。土曜日だと言うのに運動部はご苦労な事だ。

校門から向かって奥の方に有紀と元・中学最強の璃久原。手前側にはその他全員。先生は仕事があるらしく、職員室に戻ってしまった。

璃久原がキャッチャーで、有紀が審判。反対側にいる俺達が順番を決めてピッチャーをやる。その投球を二人がそれを審査するという話だ。要は、お前の投球を見せてみる！って事だ。

後、璃久原がピッチャーをやるという選択肢は百パーセントないらしい。

俺達が適当にジャンケンで順番決めるとテスト開始。

一番手は昨日入部したばかりの野々村先輩。構えてみると、なんと左投げだ。

「それじゃあ、いくぞー！」

ゆっくりと足を上げて、投球動作に入る。渾身のストレートだろうか？球速はよくわからないが、この前のバッティングセンターの球の方が速いように見える。

「こんなもんじゃね？」
「うーん」

何度か投げて見た物の、有紀も璃久原も納得いかない様子だった。

「ならば！これでどうだー！」
「おおっと」

気合の入った叫びと共に放たれた球が、璃久原の手元でクククツと曲がる。変化球だ。

「スライダーか」
「どうだ？驚いただろ！」
「このままじゃ曲がりが遅くて使えねー」
「むぐぐ……ならば必殺のおおおっ！」

再度、放たれた球は大暴投。左肩肘が下がり過ぎ、狙いを付けるはずの右手は明後日の方向。バランスが悪くなり過ぎなのは素人でもわかるぐらいだろう。

大暴投の球は、有紀と璃久原の頭上を越えて、道路越えると、そのまた向こう。学校の外周を前のめりになってヨタヨタと走っていた陸上部員の頭を直撃した。

「ふべっ！」

その一撃が限界ギリギリだった陸上部員にトドメをさした。

「あああー！！」

陸上部員が倒れると同時に、こちらからも向こうの陸上部からも悲鳴が上がるのだった。

*

色々あったが、落ち着いたところでテストを再開。二人目は掛け谷部長だ。

「いいのかい？」

「ん？どうかしたんすか？投げでいいですよ」

「僕に投げさせると、とんでもない事になる。それでもいいのかい？」

「は？」

人差し指で眼鏡を軽く押し上げると不敵に口元を歪ませる。

「ヘタレなのは知ってるから早く投げろ！時間も押してるんだから！」

「仕方ない！ならば見せてやろう！」

足を上げる事もせず、直立したまま腕だけで投げる。まるで幼稚園児のような投げ方だ。

ふわっと浮かび上がったその球は、綺麗な放物線を描いて璃久原のミットに収まった。

「ナチュラルチェンジアップだな。誰か握り方ぐらい教えてやれよ」

酷いものを見たとしても言いたそうな顔。高校生にもなって、この

レベルは何か超越したものを感ずる。

その後も数球投げてはみたが、まるで駄目。部長が練習している姿を見た事ないと思つたが、ここまで運動音痴だったとは知らなかった。

その後、石江と細田先輩が投げたら、俺の番がやってきた。

ピッチャーの経験はないが、いつものように投げておけばいいだろう。フォーム小さめのコントロール重視で、構えられたミットのど真ん中に投げ込んでみる。

「お」

「どうかした？」

「一番マシかも」

決していいと言っている訳でない。しかし、その時の璃久原の反応は、今日のテストの中で一番いいものだった。

「よし、何か変化球こいよ」

「え？ないけど」

「いやいや、何かあるだろ。見よう見まねで練習した奴とか」

「いや、ないけど……」

その後、二、三球真つ直ぐを投げたら俺のテストは終わり。変化球なんて投げられないものは投げられないんだから仕方ない。

次に投げた河岸は、ボールがワンバウンドしたり、真つ直ぐ飛ばなかったり話にならない。部長と同じレベルだ。

後続も二人が納得するようなピッチングのできる人材は現れないままテストは終わってしまう。

結局、ピッチャーは最初に大暴投を見せた野々村先輩と、予備で俺に決まってしまう。石江と青森先輩は内野守備の要だから除外、などと消去法で選ばれただけのピッチャーだ。

「こりゃあ勝てんな」

その決定を耳にした璃久原が小声でぼやいていたが、俺も間違いないと共感してしまうのであった。

10、 最初で最後にしたい挑戦

日曜日、俺達は電車で練習試合先の高校を目指していた。

相手校は川谷水産高校。それは南桜高校の隣接した市にありJRの普通電車で一時間掛からないぐらいの場所にある。駅を出たら歩いて数分だ。

この近辺では唯一の水産高校で、長期間の海上実習が特徴らしい。なんと半年もやるという話だ。もちろん、学生の本分である勉強も最低限はやった上での話である。詰るところ、部活などに掛ける時間はほとんどない高校なのだ。

夏の予選でも、初戦突破した事がないんじゃないか？と言われるぐらいの高校である。つまり、県内でも屈指の弱さを誇る高校なのだ。今の俺達の相手に相応しいというか何と云うか。

校門を潜ると、1人の教員が出迎えてくれる。挨拶だけしたら、早速グラウンドへ案内してくれた。案内など必要ない程狭い高校ではあるが。

グラウンドに用意されたベンチに荷物を降ろす。それほど、広いグラウンドではないが、海に隣接している事もあってか高いフェンスだけでなく、海側にはネットまで張り巡らされている。

ジャージに着替えて軽めのウォームアップを済ませると、練習試合が始まる時を待っていた。ユニフォームなんてあるはずもない。緊張してガチガチ硬くなっている奴もいれば、普段通り雑談してい

る奴もいる。前者が未経験者で後者が経験者という感じが。

やがてグラウンド整備が終わると、審判の合図とともに整列。それから、挨拶。ジャンケンで先攻後攻を決めた結果、俺達南桜高校が先攻になった。

ピッチャー 野々村（二年）
キャッチャー 細田（三年）
ファースト 璃久原（一年）
セカンド 青森（二年）
サード 掛ヶ谷（二年・部長）
ショート 石江（一年）
レフト 河岸（一年）
センター 三宅（二年）
ライト 葛原（一年）

メンバーはこれで全員。守備位置は前日に決めた通りだ。誰が打てるのかよくわからないということで、打順も守備番号でいく事になった。

「しまつていこー！」

南桜高校野球部創部を賭けた、野球同好会の最初で最後にしたい挑戦が今始まった。

*

一回表の攻撃。ベンチから有紀を中心に声をだす。二十人分ぐら

い用意されたのだろうか？誰も座っていない長椅子が淋しそうに佇んでいる。そんな事を言われても、うちに控えの選手何ていないのだ。

「プレイボール！」

審判の合図とともに試合が始まる。

「一番でピッチャーとか。マジで激務だわ」

「まだ何もやっていないでしょうが！文句言つてないで行け！」

投球練習を終えた相手ピッチャーは右のスリークォータ。特別球が速い訳でもなく何処にでもいるようなレベルだと思う。これぐらいなら、打てるのかも？と期待していたのだが。

野々村 空振り三振。

細田 空振り三振。

璃久原 見逃し三振。

見事なまでに三者三振。ジェノサイドだ。

「璃久原ー！一球ぐらい振らんかい！」

全くバット振る気配も見せずに棒立ちしていた璃久原に有紀もご立腹だ。一番期待されていた打者だけに、その気持ちは俺もわかる。

攻守交代。今度は守りだ。

野々村先輩はややサイド気味で100km前後のストレートとカーブとスライダーを投げる事が出来る。だが、全体的にコントロール

ルがイマイチで、いいところを挙げるのが難しいタイプのピッチャーだ。……というか、元々は野手である。

第一球。川谷の先頭打者はその球を引っ掛けた。

「セカンドゴロっと。上々の立ち上がりね」

記録は蓑島が付けている。

「ツニアウト！」

ショートゴロを捌いた石江が声を出す。

「らーいらーい……」

力なくふわりと浮かび上がったボールが俺のグラブに収まった。これでスリーアウト。思っていたよりもあっさり相手の攻撃が終了する。

ベンチに戻ると、もう勝ったかのように野々村先輩を袋叩きにして盛り上がっていた。いくらなんでも、それはまだ早いだろう？

*

二回表。セカンドゴロ。三振。センターフライ。この回も三者凡退で特に目立った動きなし。

二回裏。昨日は大暴投を見せていた野々村先輩が、ショートゴロ

三つであっさり片付けてしまふ。これはみんなの予想を良い意味で裏切ってくれている。

三回表。三者凡退。一人もランナーを出す事が出来ないまま一順目をおえることになってしまった。

三回裏。もしかしたら、いけるんじゃないだろうか？と思い始めていた南桜ナインの希望を打ち碎かれる事態が起こった。

先頭の打者にヒットを浴びると、次の打者が大きなレフトフライを打ち上げる。大きいがこれは上がり過ぎだ。これなら取れる。皆がそう思っただろう。

打球をレフトの河岸がおおきら身体を揺らしながらのっしのっしと追って行く。落地点に入ったら、こちらを向く……のかと思ったら後ろ向きのままフラフラしている。そのうちにボールは河岸の手前に落っこちた。

「あ」とも「え」ともつかないような悲鳴が各所から上がった。

河岸がバウンドしたボールを慌てて素手で掴もうとするがうまくいかず、無情にもボールは遠くへ遠くへと転がっていった。

「後ろから取ろうとするな！横からまわり込め！」

声を掛けるものの聞こえていないのか、河岸はそのまま追いかけて行く。そして、ようやくボールを捕まえた頃にはランニングホームランになっていた。

川谷水産が二点を先制。

河岸は泣きそうな顔をしながら俺達外野陣に向かって何度も何度も謝っていた。

「しゃーない、しゃーない！まだまだこれからだよっ！」

と、有紀が声を出す。だがその後も、レフトの河岸、サードの掛ヶ谷部長を筆頭に南桜はとんでもないエラーを量産し続けた。その結果、どんどん点差は開いて行く。五回終了時点で、

川谷 10 - 0 南桜

十点差。公式戦ならコールドゲームになるだけの差を付けられているのだった。

*

六回裏。気が付けば十四点差まで差が広がっていた。

流石にみんな諦めているのだろっ、疲れたような顔や落ち込んでいるような顔ばかり。中には、泣き出してしまった奴もいる。暗いムードが漂う中で、楽しそうにしている奴と言えば璃久原が一人ヘラヘラしているぐらいだ。

十五点目を奪われた後、守備のタイムマウンドで輪が作られる。伝令役になる選手がいないので、特例で有紀自らマウンドの輪に加わっていた。

外野の守備位置からでは、何を話しているのかさっぱり聞こえて

こない。ボール回しをする訳でもなく、俺達はただ突っ立っているだけだった。

少しすると、マウンドの輪の中から離れた有紀が俺に向かって手招きする。「こっちに来い」と言っているようだ。

駆け足でマウンドまで行くと、いきなり野々村先輩がボールを俺のグラブに入れてきた。

「え？」

「頼んだぜ」

「バッチリ守るツスよ！」

「落ち着いていこう」

「よろしく」

「それじゃあ、任せたわよ！」

「あ、おいっ！」

有紀は俺の背中を叩いた後、ベンチにいる先生に向かって叫ぶ。

「先生ー！ピッチャーの交代を審判に告げて！」

つまり、そういう事だ。二番手とは言われていたが、まさか出番が来るとは思っていなかった。真っ直ぐしか投げれない高校生ピッチャーとか、多分他にいないだろう。

多分、聞こえて入るのだろうが先生は有紀の言っている事を理解していない様子だ。有紀がもう何度か呼び掛けた後によやくベンチを出てきたら、

「ピッチャー交代！」

何故か選手宣誓でもするか如く右手を高々と掲げて叫ぶのだった。

「えーと、誰と誰を交代するのか教えてください」

「え？」

「いや、え……じゃなくて……」

そんな訳で、野々村先輩がライトへ行き変わりに俺がピッチャーになる。

ピッチャーなんて人生初の経験。マウンドに一人残された俺は無意識に自分の胸元をグツと強く握りしめている。まだまだ先生達のしようなないコメディが繰り広げられていた気がするが、緊張しすぎているのか全く耳に入ってこなかった。

11、終わってからのぶつつけ本番

「プレイ！」

審判の声とともに試合再開。

こういうときは落ちついて状況を確認してみよう。試合は6回の裏。マウンドには俺。キャッチャーは細田先輩。相手は、えーと、何番打者かもよくわかっていない。ランナーは三塁。ワンナウトだ。細田先輩がアウトコースに構える。ストレートしかない俺にサインなんてつくっていない。

一回、深呼吸をしてからセット。そして初球。アウトコースを狙った球は大きく外れて、細田先輩は必死に腕を伸ばしてそれを止めた。

二球目。今度は高い。明らかにボールだと分かる球だ。三球目、四球目も大きく外れてストレートのフォアボール。

指先が振っている。調子が悪いとか風邪だとか、そういうのじゃない。

細田先輩が、慌てた様子で駆け寄って来る。少し遅れて、璃久原もマウンドに上がってきた。

「あー。先輩、全部真ん中に構えとけばいいですよ」

「お前もだ。クロに投げた事もないクセに、コース狙おうとするからいけねえんだよ。ただの数合わせなんだからな」

「なっ！」

「ちょ、ちよつと、璃久原君……」

「昨日今日の急造ピッチャーが抑えるなんて誰がやってもできねえよ。もつと真ん中狙って投げてけよ。ここから零点に抑えても二十点取られてもどうせ負けだ。結果はかわんねーんだからな」

「いいたい事だけ言うと、反論も弁解も聞かない内に璃久原はさっさと守備位置に戻る。」

「まずは、ストライクを投げようか。有紀ちゃんも心配そうにしていから頑張つて」

その後、細田先輩も一言だけ言って頷いてみせると、戻っていった。

横目でチラッとベンチを見してみるそれから、思わず目を伏せた。見るんじゃなかったなんて思ったけれど、気が付くと指の震えは収まっていた。

負け確とか、期待してないとか。有紀だって、心配そうどころか怒ってるじゃねえか。好き勝手言ってくれるよ。全く。

自分の顔をバンバンと叩く。もう一回叩く。

まだ、やれる。ってか、まだ何もしてねー。これからだ。

試合に集中。細田先輩は璃久原に言われた通り、ど真ん中に構え

ている。要求どおりに投げてやる！

「ストライクっ！」

要求通りのど真ん中を相手バッターは見逃した。どうせ、入らないとも思っていたのだろう。

それなら、もう一回だ！

カキンッ！

打たれた打球は俺の右側をぬけて行く。しかし、それはショート
の正面。石江は素早くセカンドに送ると、今度は青森先輩がファーストへ。お手本のような6 - 4 - 3のダブルプレーだった。

「よしっ！」

思わず、グラブを叩く。それから、グラブをだして次のボールを待っているが中々こない。

「あれ？」

「何待ってるんすか？スリーアウトっスよ」

「ん？……あ」

石江に肩を叩かれてようやく思い出す。

そうだ、タイム取った時にワンナウトだったから、今ゲッツーだからスリーアウト。チェンジだ。よく見ると、他のみんなはもうベンチに戻っている。

何でこんなにテンパってるんだろうなあ、俺。

＊

七回、八回も無失点で切り抜けた俺だったが、九回裏にピンチが訪れた。

九回裏があるという事は、勝っているのかって？もちろん負けている。練習試合だから最後までやるだけだ。かく言う俺もさっきまでは終わりだと思っていたのだが。

先頭の打者にレフトオーバーのランニングホームランを浴びると、続く打者にはセンター返し。

ここで最後の守備のタイム。有紀が言うにはストレートしか投げられないのがバれているから狙われているという話だ。

「それなら、なげればーいいじゃん。変化球」

などと、簡単に言ってみせるのは璃久原。

「でもなあ……」

部長が言い返そうとするが、璃久原は自分の話を続ける。

「ボールを握る。腕を振る。それだけだ」

軽い実演も交えながらの簡単すぎる説明。

「チェンジアップ？」

「そうそう。握って投げるだけの簡単な球種。一、二球混ぜるだけで相手の反応も変わるだろーし、投げてみるよ」

「そんな簡単に投げれるのかよ」

「うまく落ちなくてもいいんだよ。球速に差が出れば見せるだけでいい」

「ふーん…」

そうは言われても中々踏ん切りが付かない。

「いいんじゃないツスカ？色々試してみても」

「どうせもう勝てないんだし。好きにしたらいいわよ」

それもそうである。九回の裏で負けてるんだから、最早何点取られようが同じだ。それなら、試すだけ試してみるものいいか。

「わかった」

「仕方ない。それじゃ、サイン出すからしっかり見ろよ！」

指一本でストレート。二本でチェンジアップ。本当に大雑把にサインを伝えると、それぞれの守備位置に戻っていく。

「プレイ！」

試合再開。最初の要求はストレート。構えはアウトコース低め。要求通りに投げ込み

ストライク。次も同じ。もう一回同じ所でストライクを取る。今のところ振って来る気配はない。次もストレート。だが構えはインハイ。ここで、俺は考えた。そして、セットから、ボールを投げた。

審判の腕が上がる。見逃しの三振だ。

投げた球はアウトコース低目のチェンジアップ。コースは微妙だったが、我ながらいいところに落ちたと思う。指示を裏切られた先輩もボールを溢したが、タッチプレイでアウト。これで、ワンナウトだ。

「どーよ？」

璃久原に向かって小さく人指し指を立ててみせる。

「サイン無視して傲慢とか、考えらんねーわ」

璃久原は呆れた反応をみせるだけだったが、俺は浮かれていた。なんだか楽しくなってきたところだった。

次のバッターも初球のチェンジアップを引っ掛けて、ピッチャーゴロ。続く打者はストレートを打ち上げてセカンドフライ。思っていた以上にうまくいっている。最後の回が終わってベンチに戻る時、何故か「もっと投げていたい」そんな気分になっていた。

「ありがとうございましたっ！」

それでも、試合は終わった。

*

誰がどう見ても負け試合。これで野球部になるという話はなくなる訳か。呆気ない終わり方だったけど、当然の結果だとも思う。仕方ない事なんだよな。

太陽が傾き夕暮れの濃い光が射し込んでいる電車の中。

疲れからか？大敗のショックからか？みんなほとんど会話はなく、顔合わせる事もない。

投手

野々村総一郎 5回1/3 102球 15失点 自責2

葛原幸基 3回2/3 41球 1失点 自責0

野手

石江七種 4打数2安打 1打点 1HR

俺は何をする訳でもなく、ただ一人でスコアを眺めている。何ていうか、物事の終わりの切なさのようなものを感じていた。

12、それは全部、斜め上

練習試合から一夜明けると月曜日。当然、学校に行かなければならない訳だが、如何にも休んだ気がしない。疲れが抜けないというか、まだまだ疲れの真っただ中にいる感じ。

煩い目覚ましを止めると、無駄に刺激的な朝日を避けるように布団に潜り込む。

後、十分。いや、後五分だけ……。

「起きろー!」

暫らくまどろんでいると、不意に布団をはぎ取られてしまう。こんな事は珍しい。今日に限って、如何したんだよ？俺は疲れてるのに……。

「何だよ。もう少し寝かせてくれよ……」

「それじゃあ、私は起こしたからね！後でいい訳しないでよ!」

耳元で妹のむくれたような声。それから、布団を乱暴に投げ返すとそのまま部屋を出て行った。布団を乱暴に扱ったところで痛くもないので構わないが。

布団を整えながら、時計に目をやる。

七時四十五分。

ん？おや？寝惚けてるのかと思って目を擦ってから、もう一度時間を確認。

七時四十五分。

結果は変わらなかった。どうやら、この時間で正しいようだ。

高校の始業時間が八時三十分で、家から学校まで自転車で五十分かかる。つまり、七時四十五分はもう家を出ていなければならない時間な訳で……？

「どうして起こしてくれなっただよ！」

整えたばかりの布団を蹴飛ばして、部屋を飛び出して、階段を駆け下りて、居間に掛け込む。その間僅か数秒。

しかし、そこには誰もいない。机の上にはラップ付きの朝食だけが残されているだけだった。

弟と妹はもう学校に行かないと間に合わない時間だからいないのは分かるとして、母はまた二度寝か。

「全く！」

誰もいない居間にどっかりと座りこみ、

「いただきます！」

わざと家中に聞こえるような大きな声を出す。こんなさやかな抵抗には、もちろん反応なんて帰ってこないのだが。

ラップを捨ててゆっくりご飯を食べる。全身が筋肉痛で、頭もボーンとする。その日、俺は堂々と遅刻する事を選択した。

*

「あれ？集まり悪いな」

「あんな負け方して、凹まないアンタの方がおかしいのよ。一人でスコア見てニヤニヤしてて気味悪かったんだから」

別にニヤニヤしていた覚えはないのだが、昨日の帰りの事を言っているだろう。

「はは……いつもの事だよ」

放課後の部室。そこにいたのは青森先輩と有紀だけ。もう放課後三十分ぐらい過ぎているというのに、俺を含め三人しかいなかった。石江も「後から行く」とは言っていたけど。

「それでも、部長がいらないなんて珍しいと思いますけど」

練習はしないが、毎日部室にはいる部長が今日はない。こんな日は、俺がここに来てから始めてだと思う。

「あー。今日は学校も休んでるわよ」

「流石にミスしまくりだったのは、堪えたみたいだね……」

「ふーん。これで部活も終わりだし、仕方ないのかなあ」

「終わり？何言っているの？」

「え？だって試合に負けたら部活になれないんだろ？」

「それだけの事じゃない。同好会が無くなる訳じゃないわよ。部員はいる訳だし、夏の大会までには何とかするわよ」

昨日はあんなに哀愁漂っていて、今日はこの集まりの悪さ。それでも、まだやる気なのか。「凹まない方がおかしい」などと言っておきながら、有紀が一番凹んでないようだ。

「はいはい」

部屋の隅にカバンを投げ捨てると、

「あれ？今日は三人だけなの？」

もう一度扉が開く。そこから聞こえた声は蓮子先生ものである。

「ですね」

「ですかあ」

青森先輩と頷き合った後、残念そうに続ける。

「折角、頑張ったみんなにご褒美を持って来たのになあ」

「ご褒美？」

よく見ると、先生の手には、スーパーのビニール袋が握られている。それを前面に押し出してから、

「じゃーんー！」

などと口で効果音を付けつつ取り出した物。それは駄菓子屋で売っているようなポリジューズの袋。チューペットとも言ったっけか？

「久しぶりに見たな、これ」

「あはは……」

「うれしいです」

棒読みと乾いた笑い。青森先輩がそれを受け取ってから、即行で俺に渡してくる。少年野球では有りかもしれないが、今更貰ってもうれしいものではないと思う。

「試合の日に冷凍して持ってくればいいのに」

十本入り一四九円らしい。値札が付いていて、買った場所まで分かってしまう。袋を開けて、一本取り出すと青森先輩に返した。その口を噛み切って開ける。

「文句言いながら、真っ先に開ける奴」

「別にいいだろ。貰ったんだから」

「喜んでもらえたならうれしいわ。折角調べて買って来たんだから！やっぱり野球少年にはこれなんだよね！」

先生は得意気だが、やっぱり常温のまま飲んでも微妙だった。

「とりあえず、今後の事決めないと」

青森先輩は一本も取らないまま今度は有紀に渡す。

「ふふふ、その事なんですけどね。先生からも一つプレゼントがあります！」

「え？」

「なんと、練習試合の予定を決めてきました！次こそ勝って部活に昇格しましょう！」

満面の笑みで右手を差し伸べると、悲鳴なのか歓声なのか分からない声が上がリ、

「ぶっ！ゲホッゲホッ！」

俺は飲んでいたポリジューズが喉に入ってむせ返った。

「うえっ、汚いわね！後で掃除しておいてよ！」

「予想以上に喜んでもらえた見たいでうれしいわ！」

「次の試合の前に流石に練習しないと……」

青森先輩も流石に苦笑いをするしかないといった様子だが、

「その点もバッチリです！今度の試合は一ヶ月後！時間のゆとりも考えたよ！」

「ほうむ、一ヶ月あれば何とかなるかも」

「でしょでしょ？」

有紀と先生はノリノリだった。

「そうと決まれば、さっさと連絡するわよ！幸基は一年のほづをお願いね！」

有紀はポケットから黒くて地味な携帯を取り出す。

「え？俺、石江の番号しか知らねーんだけど」

「それなら家まで走ってこい！」

「家も知らね……」

「探せ！」

相変わらず無茶苦茶だ。

「それじゃあ、先生は仕事が残ってるから頑張ってね！」

実は、チャンスなんてそこら辺に捨てたくなるぐらいに転がっているものかもしれない。それでも、それを拾うのは案外困難な事なように。

結局、その日部活に来たのはこの3人だけ。行先はまだまだ不透明だった。

13、 木偶の坊と野球と理由

朝の教室は今日も騒がしい。今日までの宿題の答えを強請る者。TV、雑誌などのメディアの新着情報を得意気に語る者。嫌でも聞こえてくるそんな話を聞き流しながら、自分の席でグッタリしているのが普段の俺である。

しかし、今日は練習試合の連絡をしなければならない。カバンを机の上に置くと、朝のダルい身体に鞭を打ってまずは石江の席を尋ねていた。

「なあ、石江。昨日何処に行っただよ？」

「昨日はそのまま帰ることになっちゃったッス。行けなくて出来なくてごめんッス」

両手を合わせて何度も頭を下げる。そこまでして謝ってほしい訳ではないのだが。なんというか、普段は自分から声を掛ける事がないので、まず何と言えいいのか悩んだ部分もある訳で。

「いや、別に責めてる訳じゃないけど。何処に行ってたのかきになるなあ……って」

「気になるんスカ？」

「そんなところ」

「ちよつと用事があつて、友達とそのまま帰る事になっちゃっただけッスよ」

「ふーん」

それでこの会話は終わり。本題に行こうか……と思っていたが、

石江は話を続けてきた。

「あ、そうッス。今日も用事があつて行けないからよろしく言っておいてほしいッス」

「別にいいけど。昨日と同じ用事なのか？」

「僕にも色々用事があるッス。こう見えて忙しいんスよ」

鼻を高くしようとする石江だが、その鼻には頂点がない。

「まあ、それどうでもいいけど。それより、一ヶ月後にまた練習試合をするからよろしくなって」

「ん？そうなんスか？わかったッス！」

一度は首を捻つものの、特に聞き返す事もなく了解してくれた。

「それで、ついでなんだけどさ」

「なんスか？」

「璃久原と河岸の連絡先分かるなら、練習試合の事を伝えておいてほしいんだけど」

「それは構わないんスけど、来てくれるんスカねえ？」

それは俺も心配している。終始ヘラヘラしていた璃久原は多分大丈夫だろうけど、問題は河岸だ。日曜日の試合で一番多くのエラーをして、試合の途中からは泣きだしてしまっただけである。相当ショックを受けているだろう。

現に、二番目に多くエラーをしていた部長が落ち込んで昨日は学校にも来ていないのだから。

「まあ、無理強いしない程度に連絡しておいてくれよ。人数、足ら

なくなったらまたその時に考えればいいさ」

「ふーん」

「どうかしたか？」

「いや、大したことじゃないんすけどね。葛原くんが珍しく乗り気だなあと思っただけッス」

その言い方は、気分が乗らなかつたら必要な連絡もしないような人物と言われているような気がするぞ？

自分でもいい人間だとは思ってないが、そこまで酷い人間でもないと思っていたのだが。

*

「あれ？珍しい」

その日の部活。そこに来ていたのは、有紀、青森先輩そしてもう一人。部活内では一番身体の高い人物。そして、一番来ないだろうと思っていた人物。河岸の姿がそこにあった。

「うっ……知らない人にまで意外だと言われると傷付くなあ。やっぱり、帰ろうかな」

「まあまあ」

青森先輩が河岸を慰める。っていうか、知らない人って俺の事だよな？むしろ俺の方が傷付いたし凹みたい気分なのだが。

部室についてから待つ事、数十分。この日、集まったのはこれで

全員。昨日よりも一人増えたら大きな進歩というべきか。全員に呼び掛けたのに集まらない事を嘆くべきか。

誰も話すこともなく、各々自由に行っている静かな部室。その静寂に耐えかねた訳ではないが、思い付きで河岸に話題を振ってみた。

「璃久原はこないのか？」

「こないらしいです。まだ練習も禁止だとか言われてるとか……」

「それじゃあ、仕方ないか」

「でも、試合には行ってくて伝えておてくれって言われました」

石江も試合までには戻って来るだろうし、一年はこれで全員OKか。自分の担当分が終わったのようになって、安堵の息を漏らした。

「それで、今から練習だけど、河岸君は大丈夫かい？」

今度は、ずっと時計を眺めていた青森先輩が声を掛ける。

「何聞いているのよ。大丈夫に決まってるでしょ。練習しない馬鹿は一人で十分よ」

練習しない馬鹿。昨日に引き続き今日も休んでいたという話の部長の事だろう。そんな言い方はせずにもう少し心配するべきだと思う。

「大丈夫です！次までには人並みになりたいので！」

身体が大きいからか、張り上げた声の音量は普段の印象からは想像できないほどの迫力があつた。

「おお、やる気あるなあ」

「は、はい！」

「よーし！わかったわ！今から千本ノックよ！」

バットを手に取り狭い室内で素振りを始める危険物を、俺は後ろから押さえにかかる。

「とりあえず、お前はやめろ！」

「何でよ！」

「当然だろ！」

有紀の暴走ノックはみんなが迷惑している事である。それに、初心者の河岸にコイツのノックが受けられるなんてとても思えないし、これ以上、自信喪失者を出して貰っても困るのだ。絶対にとめなければならぬ。

「ノックもいけど、今日はキャッチボールでもしようか」

当然、青森先輩もたすけてくれるものだと思っていた。だが、俺の援護してくれる様子はなく、河岸に声を掛けたら必要な道具だけを持ってそそくさと部屋を出て行ってしまった。それに続くような形で、でかい図体のクセに女みたいなきょどりかたをしながら河岸も出て行ってしまふ。

すると、後ろから抱きつくような体勢で絡み合った二人だけが部屋に残される。その現実を改めて考えてみると妙に気恥ずかしい。それでも何故か、そのまま二人とも固まってしまい自分から離れようとはしなかった。

「とりあえず、離れなさいよ」

独り言のような聞きとりにくい声でそう言われると、俺の方から離れるのだった。

*

見た感じでは、基本からまるで出来ていない。それは野球経験の豊富な青森先輩に断言されなくても、俺にも河岸本人にも分かっている事だろう。

だから、一から基礎を教えていくらしい。

「まずはボールの投げ方から。握りは前の土曜日に教えた通り、ボールの縫い目に中指と人差し指の腹をかける感じで」

「こう？」

「うん、そう。次はフォームにいかがか」

十数メートル離れた場所で青森先輩の抗議が続いているが、こちらからでは良く見えないし、あまり聞こえない。

蚊帳の外な俺は、その場でヤンキー座りをして出番が来るのをただ待っていた。視線を横に移すと、有紀は畑の隅でブツブツと呪詛の言葉を呟きながら草むしりをしている姿が見える。「場所を借りてるんだし、綺麗にするのは当たり前」とか言っていた。これが終わったら、手伝った方がいいんだろうな。

「それじゃあ、葛原くん用意はいいかい？」

「いつでもどうぞー」

青森先輩の合図があると、左手を上げて立ち上がる。それを確認してから、河岸が俺に向かってボールを投げた。

「おっと」

丁度、俺の真横でバウンドするような球。グラブだけ出して掬い上げようとしたが、失敗して弾いてしまった。

「おい！有紀！それ拾ってくれよー」

転々と転がっていくボールの先にいる人物に声を掛けた。だが、有紀は無言で振り返ったと思うところを一瞥しただけで、すぐに視線を戻してしまう。

「全く……」

仕方がないので、自分で球を拾いに行く。

「思った通りに投げれたかい？」

「うっん」

「そうだね。今は上半身だけで投げようとしていたし、足が明後日の方向を……」

ボールを投げ返そうとしたが、もう次の講義が始まっていたので、ボールをグラブに叩き付けながら定位置に戻って座り込む。

その後も思ったように投げる事は出来ずに、結局、五メートル間隔でキャッチボールをする事になった。流石に高校生でこれは近過ぎると思う。

キャッチボールを終えると、今度はゴロを取る姿勢。フライを取る姿勢。簡略した感じで基本的な動作を教えて行った。俺は講義の後に一回だけボールを投げるお仕事。退屈すぎてあくびが出るが、これも必要なことだろう。

そんなほとんど座っているだけの練習も終わり、後片付けをしている時の事。

「正直、言ってアンタが一番来ないと思っていたわ」

有紀が河岸に話し掛けた。俺も思っではいた事だが、流石にそれは正直に言い過ぎだろう。

「僕には、やらなきゃいけない理由があるんですよ」

その時の反応は意外にしっかりとした意志の籠ったものに感じた。

「ふーん、どんな？」

「璃久原くんの肘の怪我なんですけど……」

「ああ、解離性軟骨炎だったわけ？」

「本当は練習のしすぎではなくて、家の妹が怪我させた事が原因なんです」

一瞬にしてその場空気が変わるような感触。感嘆の声も上がらなかった。

——だから、僕は罪滅ぼしをしないといけない。

河岸は顔を伏せてそう言った。俺も青森先輩も有紀までもが黙り

こみ固唾を飲んで次の言葉を待っている。だがその日、それ以上の事が語られる事はなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6148y/>

南桜高校野球部

2011年12月17日18時52分発行